

日本語 ⑨

目次

詩を読もう

一 ジャンガダ

二 水

ジュベナル・ガレノ
大関 松二郎

ノルデステの旅

ことばを調べる

一 話す場合と書く場合

二 送りがなのつけ方

土に生きる

一 新しい土地

二 開けていく村

三 アンケート

紙とわたしたちの生活

一 紙は文化のバロメーター

二 製紙工場を見る

三 新聞ができるまで

四 活字

五 新聞の利用

エチケット

川 柳

一 うたたね

二 川柳について

良い文章を書くには

一 気軽にペンを取ろう

二 ふ号の用い方

短い作品

一 天国

二 金魚売り

リンドルフオ・ゴメス

小川 未明

(005. jpg 挿絵あり)

水と空気

一 水げん地で

二 空気の成分

詩 三題

一 風 船

二 野ばら

三 たき火

イザベル王女

「自分」について考える

一 人の値うち

二 反 省

三 自分を大切に

フットボール試合

放送劇 ウイリアム・テル

からだをしようぶに

一 人間のからだ

マヌエル・ハンディラ

近藤 朔風

北原 白秋

二 病気の予防

小説

一 赤毛の男

アフオンソ・シユミット

二 港の少女

壺井 栄

課外

分銅屋のえんとつ

ハンス・クリスチャン・アンデルセン

おもなことは

今までにならった漢字

新しい漢字

内容について

先生と父母へ

教育漢字表

口絵写真の説明

カリベール(Caryber Hect. Juli
o Paride Bernabo)は、一九二二年、ブエノス・アイ
レス市の郊外、ラヌースで生まれた。後年ブラジルに帰化して、ブラ
ジル人と

なった。長い間、南米諸国を旅行して絵の修業をした。一九五〇
年、バイアに定住し、このんで、バイアの風物と人々の生活を描き、現
在ブラジルの一流画家として高名である。

カリベールについて、彼の画集出版にあたり、バイア出身の人気作
家 ジョルジェ・アマドが、次のようなことをのべている。

「カリベールを、外国生まれの画家に仕立てたのは、かれをブラジル
画だんに押し出した詩人オドリコ・タバレスの演出(えんしゅつ)で
あろう。"カリベールは、愛してやまないバイアに、身も心もささげ
るためにやってきた"と言う。それも、そのはず、かれこそ、本当の

バイアノなのである。そうでなければ、これほど完全に、深く、バイアの生活を描くことは不可能だと、わたしは思う。かれこそ、まことのバイアノであり、ブラジルが生んだもつともすぐれた画家である。」

ジョルジエ・アマドも言っているように、カリベーの出身地ははっきりしていないが、バイアを描いて、かれの右に出る画家はない。この口絵写真は、かれがバイアの海辺に取材したデッサンである。

詩を読もう

一 ジャンガダ

ジユペナル・ガレノ

白い帆(ほ)のわたしのジャンガダ

おまえは どちらの風がすき

陸からの風

海からの風

白い帆のわたしのジャンガダ

おまえは どちらの風がすき

緑の港を

考え深そうに 迷っているように

波にまかせて流れている

白い帆のわたしのジャンガダ

おまえは どっちの風がいいの

波の上を

からやかにまう白うなぎのような

牧場で

思いにふけるおとめのような

白い帆のわたしのジャンガダ

おまえは どっちの風がいいの

(新漢字 牧)

(新ポル語 j a n g a d a, J u v e n a l, l e n o)

(007. j p a g e 挿絵あり)

おまえの白い帆の下で

波のしづきを浴びながら

ありあまるほど魚を取った

さあ 陸の方へかじを取ろう

白い帆のわたしのジャンガダ

おまえは どっちの風がいいの

二 水

大関松三郎(おおせきまつじろう)

大きなやかんを

空のまん中まで持ち上げて

とつくんとつくん 水を飲む

とつくんとつくんとつくんとつくん

のどが鳴って

によろ によろ によろ 冷たい水が

のどから むねから いぶるるくはくる

とつくんとつくんとつくん

によろ によろ によろ

(008. jpdg 挿絵あり)

息を止めて やかんに吸いつく

自動車みたいに 水をつぎいんでくる

飲んだ水は すぐまた 汗になって

からだ中から ぷちっとうみぎ出てる

もう いっぱい

もう 一息

とつくん とつくん とつくん とつくん

どうして こんなに 水は うまいもんか

なあ こんな水が なんのたしになるもん

かしらんが 水を飲んだら やつと こしがしや

んとした ああ 空も たんぼも

すみから すみまで まつとおだ

お日さまは たんぼのまん中に

白い光を ぶちまけたように 光っている

遠いたんぼでは しろかきの馬が

ぱしゃっ ぱしゃっ

水の光をけちらかしている

植えたばかりの 苗の頭が 風にふかれて

もう うれしがって のび始めてるようだ

さつき飛んでいった かつこうが

村のあの木で 鳴き始めた

(新漢字 吸汗苗)

(009. jpg だぶる)

(12 pag 13 pag 抜けている)

(010. jpg 挿絵あり)

ウロへ出たものだ。だから、この町は、当時、港として、大いに栄えた。北部セルトンへの、重要な基地ではあるが、昔ほど、栄えてはいない。今でも、南部へ出かせぎに行く者は、非常に多い。だが、一、二年で帰ってくる者が多いようだ。わたしを見るなり、にににとして近づき「サン、パウロから来たのか。」ときくのは、みな出かせぎに行ったところのある者だ。中には、「日本人の家で働いた。みんないい人だった。みそしるの味が忘れられない。ことし中に、また、出かけるつもりだ。」など、なつかしそうに話す者もいた。

朝四時過ぎに、ペトロリナを出発した。十一時ごろサルゲイロに着いた。人口四千の小さい町だ。ここは、ベルナンブコ州のセルトンでの交通上重要な所で、トラックやバスの休止所として活気が見られた。

この辺から、ピアウイ州にかけての牧場は、非常に広大なもので、境界にさくなどはない。だから、他の牧場の牛と入り混じってしまう。

そこで、各々牧場の焼き印をおしておいて、一年に一度、子が生まれる前に、他の牧場に入りこんでいるのを連れてくる。

セルトンでは、どこでも地下水に塩分が多く、いい飲み水のある所は少ない。特に、サルゲイロは、水の悪い所だ。

ホテルで、水を浴びたが、せっけんがきつぱりとけなかった。

カリリ地方

サルゲイロを出発して、ジャチを過ぎ、し

ばらく行くと、はるかに、アフリペ高原が見

えてきた。標高二千メートルの高原が、百数

(新漢字 基 昔 忘 休 止 辺 混 各 標



(新ポルトガル語 Pernambuco Sertão Piauí

Cariri Jati Araripe)

(011.jpg 挿絵あり)

十キロにわたっているのは壯観である。この高原は、カアチンガの中に

ありながら、高いので常に函雲をひきつけて、この地方一帯を、かんば

つから救っている。

ジャチの北西、クラトは、人口二万、セアラー州指折りの大都市だ。

この地方は、十七世紀の終わりごろまで、カリリ族の集団地だった。そ

れで、カリリ地方とよばれる。かん李でも水がかれないので、昔から農

業がさかんだ。特に、ラパヅラは主要な産物として知られている。

サン・ゴンサロ・ダム

朝 アラリ・ペ高原の空港をたつ。数分間で緑地帯を過ぎ、カアチンガにはいった。カジャゼイラス付近には、あちらこちらに、給水・かんがい用の貯水池が、いくつも見えた。貯水池は、アステといって、山間の流れをせき止め、また、雨水をたくわえる仕組みになっている。

カジャゼイラスは、人口二万余。パライバ州のセルトンでは、パトスに次ぐ都市だ。ここは暑い。カリリ地方以外、どこにでも水売りがいたが、ここには特に多い。アステの水を石油かんに入れ、ブーロのせにつけて、せんとく用の水として、売り歩いていた。この水売りは、ほとんど十五、六才の少女だ。飲み水は、タンクをつけた牛車で配達していた。

午後 近くのサン・ゴンサロ・ダムに行つた。とちゅうのカアチンガでは、モコ綿のさいばい がさかんだ。サン・ゴンサロ・ダムは、アステの水を引いて、作られたも

のだ。青々としげった木に囲まれたダム

(新漢字 壮緑 給貯池 念)

(新ホル語 caatinga Crato Ceara rapadura
a Saõ Gonçalo Cjazeirasa acude Pa
raiba burro)

(012. jpg 挿絵あり)

ほとりに、農事研究所 所員の住宅

ホテルなどが散在している。

ノルデステには、約五百のアステ

があるが、規模の大きいのは、ほと

んど連邦政府が建設したものでサ

ン・ゴンサロ・ダムも、その一つだ。



acude

ホテルは、研究所に所属していて、視察者や旅行者のための設備なのだ。

夕食には、このホテルの畑でできた野菜を、たくさん出してくれた。

庭に、マンガがえだもたわわになっていた。バナナもよく育っていたし、

ぶどうも植わっていた。夜になると、すずしい風が吹いて、昼の暑さを

忘れさせた。この風は、リオ・グランデ・ド・ノルテ州のモソローあた

りから吹いてくるので、土地の人は「モソロー」とよんでいる。夏にな

ると、毎晩九時ごろから、きまつて吹いてくる。

ベランダで、研究所の人たちから、ダム歴史や、カボクロの生活について、興味ある話を聞いた。

フォルタレザまで

次の日、サン・ゴンサロをバスでたち、ソウザへ行った。それから、ジャグアリベ川にそつてフォルタレザへ向かった。ジャグアリベ川の水はかれていた。それへ注ぐ支流も、みな底を見せて、すなの道になっていた。ただ、わずかに、貯水池のある付近だけが、生氣を保っていた。

(新漢字 模 邦 属 視 晩 興 支 保)

(新ポル語 manga Rio Grande do Norte Mossoro caboclo Fortaleza Jaguaribe)

(013. jpg 挿絵あり)

この地方の産業は牧ちくで、やぎやブーロの飼育が、他州よりも盛んか

んだ。牛も、ひでりに強いパー・ヅロとよばれるクリオウロ種が多い。バイア州でも見たが、この地方でも、家畜の飼料として、パルマというとげのないサボテンをさいばいしていた。このサボテンは、三十年ほど前、アフリカから移植した物で、かんばつ地帯では、何よりの飼料だという。

イコーからジャグアリベの町、そして、ルツサスを通過した。ルツサスは海岸から四十キロ、ジャグアリベ川の岸にある町だ。この付近は、カルナウバやしが多い。この葉から取れる、ろうはレコードを作る原料として、外国に輸出されている。

くたくたにつかれて、夜
フォルタレザに着いた。フ
オルタレザは、人口二十五

万、サルパドルに次ぐ、ノルデステ第二の都府だ。

ノルデステの海

ノルデステの海は、どこも美しいが、ひか
らびたセルトンを、いく日も見てきた目には
フォルタレザの海が、うつとりするほどきれ
いに見えた。

南部の海の色は青いが、ノルデステの海は
緑色で、目がさめるようだ。そして、海岸に

(新漢字 飼 輸)

(新ポル語 Peiduro crioulo Bahia palma
Ico Russas carnauba Salvador)

(014 . jpg 挿絵あり)

は、ココやしがり立ちならび、すず

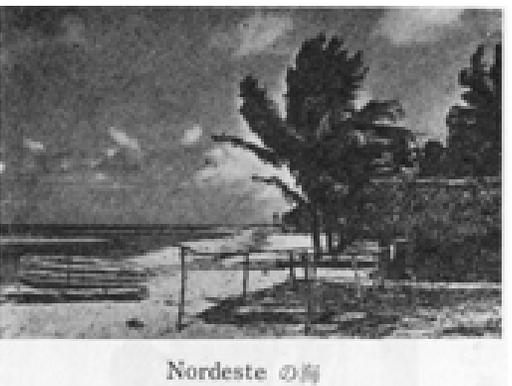
しそうなかげを作っている。

その後ろに見えるモカンボ

は、ジャンガデイロたちの住ま

いだ。

ジャンガダは、バイアからマ



Nordeste の海

ラニヨンに至る海岸に見られる

特有の漁船だ。これは、元この地方に住んでいた、ツピナンバ族の用いたいかだのつり船だ。

ジャンガダは、三角帆とかじだけであやつるもので、実に軽快に走る。

ことばを調へる

一 話す場合と書く場合

わたしたちのことばは、文章に書くときと、声に出してしゃべるときとでは、ずいぶんちがいます。

ある日、わたしはバスに乗って、友だちの所へ遊びに行きました。そのとき、わたしの前の席に、ふたりの女学生がこしかけて

「それがね、ほら、あれでしょ。だからね、そうなのよ。」

「まあ、そうかしら。だって、あれなんですよ。」

「そうなのよ。だから、無理もないといえば、無理もないけど……。」

なぞと、さかんに話し合っていました。このふたりには、わかっている

(新漢字 至 漁 軽 快) (新ポル語 mocambo · jangadei
ro Maranhao tupinamba)

(015. jpa)

のでしようが、わたしには、なんの事が、さっぱりわかりませんでした。
ふたりだけに、よくわかっているのは、なぜでしょうが。

第二は、何について話しているか、ふたりには、よくわかっていたと
いうことです。

第二は、ことばの意味を、ふたりとも、よく知っている、ということ
です。

第二は、ことばが足りなくても、身ぶり、手まね、声の高低、強弱な
どで、話の内容を補うことができる、ということなのです。

ふだん、家庭の人や友だちと話す場合の外に、先生の話、討論会、そ
れからラジオやテレビの放送などで話す場合があります。

手紙や日記、記録その他の文章は書いた場合です。

それでは、話す場合と、書く場合とでは、どんな点がちがっているか
考えてみましょう。

現代では、話す場合と、書く場合の形が近づいていますが、それでもやはりちがいがあります。そのちがいを、比かくしてみましよう。

文章の場合。

話す場合。

- | | |
|---------------------------|------------------------------|
| 1 文がわりあいに長い。 | 1 わりあいに短い。 |
| 2 文の順序がふつうである。 | 2 順序がふつうでない場合がある。 |
| 3 同じ語を何回もくり返すこと
とが少ない。 | 3 同じことばをくり返すことが多
とが少なくない。 |

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 4 言いかけで、文を終わること
とが少なくない。 | 4 言いかけで、文を終わることが多
とが少なくない。 |
|-----------------------------|-------------------------------|

- | | |
|------------------------------|---------------|
| 5 文の成分が、省かれること
がわりあいに少ない。 | 5 一部を省くことがある。 |
|------------------------------|---------------|

(新漢字) 低弱補討論比省

(116. j. 10)

- | | |
|--|--------------------------|
| 6 「あれ」「これ」といふよう
な 指示することばが、わり
に多い。 | 6 指示することばが、わりあいに
少ない。 |
|--|--------------------------|

あいにいふな。

7 「でも」で結ぶ人が多い。 7 「だ」「です」「ません」

「でも」を使っている人が

多い。

このように、書く場合と、話す場合とでは、だいぶちがいがありません。
いふばは、正しく、わかりやすく、すなおに、美しく、というところが
大切です。わたしたちは、話す場合でも、書く場合でも、目標をここに
置くように心がけたいものです。

二 送りがなのつけ方

「空が青い」というとき、「空」も「青い」も、それぞれ一つの「い」ば
です。「空」は、漢字だけで表わせますが、「青い」は、漢字のあとに、
かなの「い」をつけなければなりません。この「青い」の「い」のよう
なのを、送りがな（おくりがな）といっています。

送りがなのつけ方には、法則があります。「青い」という書き方では
「あおい」という発音の中の「あお」が、漢字で表わされます。同じよ
うに、「海がまあかった」「かべをまあくぬった」「も」「あお」の所に

漢字を当てて

海が青かった。かべを青くぬった。

と書きます。「高い山だ。」や、「軽くなったトランク。」の、「高い」や「軽く」も、このなかまです。

(新漢字 示)

(017. rpa)

「美しい花」とか、「悲しい物語」のような、「しい」のつくことばの送りがなは、「し」からつけます。「新しく建てた学校」「楽しかった運動会」なども、このなかまです。

「青い」も「美しい」も、様子を表わすことばですが、このなかまには、次のように、まだいろいろな送りがなものがあります。

明るい教室 大きな損書 小さいほう石 細かいあみ目

冷たい飲み物 少なくなる 楽しいたより 暗いへや

「夜は静かだ」の「静かだ」は、やはり様子を表わすことばですが、文の終わりに使うとき、「だ」で終わる所が、「青い」や「美しい」と

はちがつています。このなかまの「とば」には 次のようなものがあります。

豊かだ 健やかだ 明らかだ 確かだ 清らかだ

「みんなで遊ぶ」の「遊ぶ」という書き方は、漢字の所が、「あそ」の発音を表わしています。このことばは、次のように、いろいろ変わりますが、漢字に「あそ」の発音を当てて書くことは共通しています。

遊ばない 遊びます 遊ぶ 選べば 選ぼう 遊んだ

「遊ぶ」は、動作を表わすことばです。このなかまの「とば」は、「読む」とか、「書く」とか、「話す」とか、たくさんあります。

動作を表わすことばには、特別な送りがないものがあります。

「えい画会が終わる」の「終わる」には「わる」とつけます。それは

(新漢字 損 豊 健

(018. j. p. 26

「終える」と読み誤られないためです。

次の送りがないも、このなかまです。

預かる 定まる 決まる 落ちる 重なる 高まる

預ける 定める 決める 落とす 重なる 高める

「後」という漢字は、「こ・こう・のち・うしろ」といろいろな読みます。そのため、「うしろ」と読むときは「後ろを回く」というように「ろ」をつけます。

このなかまには、次のようなことばがあります。

幸い 半ば 情け 災い

「木を植える」と書くときは、漢字の「植」に「える」と送りがないをつけます。けれども「うえき」の場合には、送りがないをつけないで

「植木」と書きます。

次のことばも、このなかまです。

受付 取次 待合室 乗組員 小売商 物語 夕立

小包 試合 織物 建物

(新漢字 誤 預 幸 半 情 災)

土に生きる

一 新しい土地

おふろの水くみが終わってから、わたし

は、野菜畑を見に行きました。この野菜畑

は、ここに移ってきて間もなく、父と兄が

雑木林を切り開いて作ったものです。一千

平方メートルの畑に、大根、にんじん、え

んどう、ねぎなどが、青々としています。

みんな、姉とわたしが、種をまき、水かけ

と除草を受け持つて育てたのです。一週間前にまいた、ほうれん草も

ぽつぽつ芽を出し始めました。

畑のそばを流れる小川は、きのうの雨でにじっています。その小川が

ら向こうが、わたしのうちの耕作地で、ゆるいしゃ面が原始林に続いて

います。耕作地には、山焼きのあとに残った木が、あちらこちらに重なる



地 たく 開

り合っています。えだを打ち落とすフォイセの音、幹を切るマシヤドのひびきが聞こえてきます。白いシャツが、ちらちらするのは、働いている父や兄たちです。

山焼きの仕事も、もう一息です。焼け残りのえだを集めて、焼いてしまえば、すぐカフェのコバをほり、そして、間作のとうもろこしをまくのです。

(新漢字 雑 根 除 幹)

(新ポル語 foice machado cafe cova)

(021. 1123)

去年の十月ごろ、父と兄は、この土地を視察して、すっかり気に入り、この入の手続きをしました。

ことしの初め、父と兄が来て、入植の準備をしました。準備が終わったとき、わたしたちは、ここへ移ってきました。それは、今から二か月前のことです。

わたしたちは、朝早く、村の人たちに見送られ、荷物を積んだトラッ

クに乗って出発しました。ブラジルに移住してきて、はじめて自分の土地に移っていくのですから、心の中は明るい気持ちでいっぱいでした。しかし、住みなれた村を去るのは、なんとなくさびしい気がしました。長い長いトラックの旅でした。はじめて見る原始林の広大さにおどろきました。出発してから二日目の夕方、ここに着きました。そしてその日から、わたしたちの新しい生活が始まったのです。

父と兄は、耕作地の仕事に、姉とわたしは、母と共に家の回りの仕事に、一生けん命です。

土間には、もう、とうもろこし、カフェー、フェイジョンなどの種を入れたぶろろが、何俵か積みあげられています。作物のまきつけも間近で、これからは、いよいよ忙しくなるでしょう。

わたしは、野菜畑を二回りしました。自分でたがやした土地に、作物が育っていくのを見るのは、なんとも言えないうれいものです。

わたしは、夕飯のおかず、大根とねぎを取りました。そして、もう一度野菜畑をながめました。

二 開けていく村

午後の太陽が、かんかん照っています。わたしが、卵を入れたセスタをきげて、物置き小屋に帰つてくると、入り口に兄がいました。

「どうだい、きょうは。」

「きのうより、二ダース多かつたわ。」

「これから、ぐんぐんふるよ。はるえも楽しみだね。」

兄は、にっこりして、たばこに火をつけました。わたしは、物置き小屋のメーザの上に、セスタを置き、額の汗をふきました。

わたしのうちでは、ことしから養けいも始めました。

三月に、二千羽のひよこが、遠い町から送られてきました。紙はこから出されたひよこが、小屋のすみにかたまつて、ピヨピヨと鳴いています。

「わたしにも、世話をさせてよ。ね、お

とうさん。」

わたしは、一生けん命に、育すうを手
伝いました。はじめてなので、いろいろ
な失敗もありましたが、九百羽ほど、育
てあげることができました。

「上でき、上でき。はるえが、よく世話
をしてくれたからだよ。」

と言って、父は、ほめてくれました。

しかし、本当は、父や兄の苦心に因る

(新漢字 卵 額 羽 因)

(新ポル語 *cesta mesa*)

(023. jpa)

のです。日曜日ごとに、父と兄は、方々の養けい家をたずねて、育すう
の方法や、飼料の配合法を習ってきました。また、本で調べたり、専門
家に、手紙で問い合わせたりして研究したのです。

こうして、うち中で育てたにわとりが、一週間ほど前から、卵を生み始め、日ましにふえるので、集めるのが、何よりの楽しみです。

その外、ぶたが、今では二十頭もいるので、夕方は、家ちくの世話で、目の回るような忙しそうです。

わたしが、卵をセスタからはこに移しているとき、兄が、思い出したように言いました。

「おそいなあ、おとうさんは。」

「あら、どこへ行ったの。」

「会長さんのうちだよ。組合を作る相談会だぞうだ。」

「組合を作るの。」

「ぞうだよ。組合ができれば便利だからな。」

兄は、たな から大工道具を取って、家の方へ行きました。

夕方、父が帰ってきました。

兄は、すぐ相談会の様子をたずねました。

「うん、大体まとまったよ。生産物を個人個人で売るのは不利だという

「とほ、だれでも知っているからね。」

「もう、組合の役員なども、決まったのですか。」

「いや、まだそこまではいかない。それから、四、五けんずつが共同で、トラクターを買ったらどうだろう、という話が出たよ。」

（新漢字 専門 個）

(224. j. p. 22)

「それはいいですね。これからは、旧式の農法はやめて、どんどん機械化していかなければだめです。しかし、トラクターは高いから。」

「それがね、地主の場合、半額ぐらいは、銀行で貸してくれるぞうだ。」

「そうですね。それで、借った金は、いつまでに返すんですか。」

「それは、話しあい、二年とか、五年とかに分けて返済するのぢや。」

「ぼくは、大賛成だな。トラクターがあれば、うんと生産があがりますからね。」

夕飯の時、兄は、いまに大農場を経営して見せるぞ、ゆめのよような話をしました。しかし、父の話によると、それも決してゆめではないぞう

です。日本の耕作地は、国土の約十四パーセントで、その大部分が耕作されています。ところが、ブラジルは、耕作が不可能な土地というのはほとんどない国です。でも、わずかしが耕作されていないのだそうです。

三 アンケート

きょうは、静かな日曜日です。ベルンダで、父は新聞を読んでいます。

兄は、紙に何か書きこんでいます。

「何、書いてるの、にいさん。」

「組合からのまれたんだよ。」

「ちょっと見せて。あら、アンケートね。」

「組合は、来年の事業計画をたてるため、ここの事業量を検査しておくんだよ。」

(新漢字 旧主額済賛能率経営可量検査)

アンケート

- 一 家族の人数 使用人員数
- 二 所有土地面積
- 三 現在の耕作面積
- 四 所有農器具と機械 その種類と数量
- 五 本年度の種目別農作物の出荷数量
- 六 副業の種類 その数量
- 七 来年度の事業計画

兄は、農業日記や家計簿を調べたり、そろぼんで計算したりして書き入れていましたが、終わりの所で、父にたずねました。

「おとうさん、来年は耕作地を拡張しますか。」

「拡張もしたいが、にわとりをふやしたいね。」

「どのくらいですか。」

「そうだね。もう二千羽くらいどうだろう。」

「いいでしょね。」

兄は、全部書き入れてしまうと、父に見せました。そして、兄は、次のようなことを、わたしに話しました。

——ことしは、近所のうちと共同で、トラクターを買ったので、らっかせいの、さいばい面積は、去年の倍だった。また、にわとりも、よく卵を生んだし、組合のおかげで、生産物はみな良い値段に売れた。うちの収入も、ずいぶん多くなっているが、肥料代、農薬代、やとい人の賃金などの支はらいも多かった。——

それから、兄は、来年の事業予算などを計算していましたが、そろば

(新漢字 荷 拡張 値 収 肥 賃)

(226. j-pa.3)

んを置いて、言いました。

「おとうさん、もっと広い土地で、大農式にやりたいですね。」

「まあ、そんなにもわけてるな。こゝを完全な農場にしてからだよ。」

父は、にににしながら、い言いました。

(横書き 赤い鳥全てに囲いあり)

この道

北原(きたはら) 白萩(はくしゆ)

この道は、
いつか来た道、
ああ、そうだよ、
あかしやの花がさいてる。

あのおかは、
いつか見たおか、
ああ、そうだよ、
ほら、白い とけい台だよ。

この道は、
いつか来た道、
ああ、そうだよ、
おかあさまと馬車で行ったよ。

あの雲は、
いつか見た雲、
ああ、そうだよ。
さんざしのえだもたれてる。

「赤い鳥」

紙とわたしたちの生活

わたしたちが読む本や新聞は、紙でできています。おかしやくだものを買えば、それらを包んだ物、入れたばかり、結んだひも、みんな紙です。さて、代金をはらおうと、財布から出したお金も、また紙でできています。ノート、便せん、ふうとう、切手など、なんと、紙で作った物の多いんですよ。

これまでに、発明された物の中で、紙は、飛行機や、ラジオ、テレビの発明におとらない、すばらしい物です。紙は、どれほどわたしたちの

(新漢字 財布)

(027. jpg 挿絵あり)

生活を便利にし、文化の向上に役だったかわかりません。

紙は、いつごろ発明されたのでしょうか。

今から二千人百年ほど前、中国で発明されたといわれています。しかし、現在使われているような製紙機械が発明されたのは、オランダとフランスで、それは、百五十年ほど前の事です。

紙は、パルプを原料としています。

パルプは、次のようにして作ります。

まず、木材をすりつぶすか、細かくき

ざむかします。それに、かせいソーダ

などの薬品を加え、にて 処理すると、

セルローズという物になります。これ

をさらした物がパルプです。これを遠

くに送る場合は、かんそうします。

原料としては、木材だけでなく、わらなども使います。ボール紙は

わらを原料として作った物です。また、古新聞やほ紙も、新しい紙に

再生することができます。

日本には、和紙というものもあります。

紙は、文化のバロメーターといえます。それは、紙の使用量の多い国

ほど、その国の文化が高いという意味です。わたしたちの国では、年々

紙の需要が多くなっています。

二 製紙工場を見る

原料の置き場

わたしたちは、製紙工場を見学した。最初に原料置き場を見た。倉庫の中の片側に、パルプのたばが積んであった。ユーカリのパルプですくて、白い板をきちんとたばねたような物だった。片側には、あざ絹 錦などのくすが、大量に積みあげてあった。これらも、紙の種類によつて、原料になるのだそつだ。

原料をとかす

パルプは、大きなタンクに入れられる。水を加え、よくたたきほごして、てん料や蕃 equalizer が加えられ、さらにきめの細かい物にされる。てん料というのは、白いねん土である。これを混ぜると、紙がすき通らなくなり、また、仕上げたとき、表面がなめらかになる。蕃 equalizer は、じゅしや みょうばん である。じゅし を入れると、紙が水に強くなり、インキで

字を書いてもにじまない。みょうばんは、紙の色をいっそう白くし、き

めを細かくする。

色紙を製造するときには、ここで色素を加える。

紙すき

うすい のり のようになった原料に
“たも”という液を入れる。ブラジルでは、たもの代わりにサボテンのしるなどが使われている。これは、紙に光たぐ

(新漢字) 倉庫片絹色素液

(029. 110. 34)

を与えるためである。こうして、すっかり調整された原料は、金あみのまるいつつの上に、一定の厚さに乗せられる。すると自動的に毛布でできたベルトに乗せられ、だつ水機に運ばれる。水けのなくなった原料は、平らにおし固められ、かんそう機の中を通され、光たぐ機の中に入れられる。ここから出されたときは、完全な紙になっている。紙はまき取り機で、わくにまかれていく。

荷造り

わくにまかれた紙は、取りはずされて、さい断機で一定の大きさに切られ、包そうされていく。できあがった製品は、どんとん、倉庫に運ばこまれる。

工場の機械は、昼夜休みなく動き、工員は、一旦二交代いで働いているのだそうだ。こうして、紙は、どいどいで生産されている。

三 新聞ができるまで

社会には、毎日いろいろな事が起る。それらのでき事は、世の中を変わらせたり、進めたりする。

新聞は、世界の大きなニュースはもちろん、路上での小さなでき事まで、絶えずわたしたちに知らせてくれる。その新聞は、どのようにして作られているのだろうか。新聞社をたずねて、見たり、聞いたりした事を書いてみよう。

取材

たとえば、どこかに新しい学校ができたとする。新聞記者は、その

学校に行つて、学校ができるまでの事や、今後の事も聞いて記事にする。
(新漢字 与 整 断 包 絶 取)

(030. jpg 挿絵あり)
る。

大きなでき事があると、その写真などもとる。また、事件によっては直接関係者に会つて、その談話を書きとる。

このような取材活動のため、大きな新聞社では、国内各地に支局や通信員を置くばかりでなく、外国にも、通信員を出している。

編集

編集局には、電信、電話、郵便などで

各地からニュースが集まってくる。しか

し、新聞は、紙面に限りがあるので、集

まった原稿を、全部採用することほ

さない。それで、編集局は、ニュースと

して、価値の高いところから、のせるものを決めていく。

また記者の書いた原稿をちぢめたり、補ったりする。記事の位置

を決め、見出しをつけるのも、編集局のだいじな仕事である。

組み版

編集局でまとめられた原稿は、工場へ回される。工場では、賃賃が原稿通りに活字を拾っていく。今では、ラインタイプという機械も使われている。これは、大きなタイプライターのようなもので、自動的に活字を作り、組み版をし、新聞の体さいにまで作りあげてしまう機械である。

拾い出した活字は、組み版といって

新聞の一面の体さいに組みあげられる。

組み版が終わると、誤植はないか、組

み方はどうか、などを調べるために、

（新漢字 編採 価値 体 謬）

(031. jpg 挿絵あり)

校正刷りという仮り印刷を行なう。そして、これを原稿といっしょに編集局に送る。

校正

校正刷りを、原稿と照合して、誤りを直すことを校正という。校正を何度もくり返した後、印刷部に回す。

印刷

校正の終わった組み版を、新聞二ページずつの大きさに組みあげ、今度は、紙型を作る。この紙型からえん版を作り、これを輪転機にかけて印刷する。

新聞の用紙は、まき取り紙といって

はば約一メートル、長さ七キロメートル

ぐらいの紙をまいた物です。

輪転機は、この用紙を、一方の口から飲みこみ、つつ形に取りつけたえん版の間を通しながら、うら表に記事を刷りあげ、二ページの大きさに切り、さらに、四つに折りたたんでき出す。刷りあがった新聞が、たきの水のように出てくる様子は、みごとな物である。

発送

輪転機からはき出された新聞は、発送部に行く。発送部では、荷造り

して、發送する。

新聞は、社会のでき事を、少しでも早く、正確に報道する役目を持っている。取材から發送までの仕事を、短い時間内に仕上げなければならぬので、多くの人が、心を合わせてきびきびと働いている。

(新漢字 正刷 仮行 照輪)

(032. jpg 挿絵 表有り)

四活字

新聞その他刊行物の印刷に、最も広く使われるのが活字です。活字は、なまりを主とする合金で作ります。これは、うら返し文字をつまぼりにした物です。

この活字をならべて、文章に組み、インキをぬって、紙に印刷するのです。

活字には、いろいろな大きさの物があります。字体にも、いくつかの

種類があります。

漢字の活字の字体で、いちばん広く使われているのは「明朝体（みんちようたい）」です。明朝体は、水平な線は細く、すい直た線は太く表わしてあり、水平な線の画の右はしに小さな三角形をつけるのも、明朝体の特色です。

活字には、その外、この本で使っているような「教科書体」「ゴジック体」などがあります。

五 新聞の利用

新聞は、興味のある珍しいでき事だけを、報道しているわけではありません。わたしたちにとって、大切なこと、知っていなければならぬ事も、取りあげています。

今は、民主主義の時代ですから、国の政治も、国民全体の意見によつ

（新漢字 刊色 義）

て決められるのです。国民のひとりひとりが、政治の動きについてはもちろんのこと、文化、経済、社会などのすべてにわたって、ひと通りの知識や、これからの進み方についての見通しを持つことが必要です。

新聞が、新しいでき事を報道するのは、人々に国内や国外の情勢についての知識を与え、それによって、正しい判断ができるようにするためです。

また、新聞は、「原子力の平和利用」とか、「新しい医薬の発明」とかを、人々に伝えます。それは、文化の進歩や、科学の発達についての知識を広めるためです。それで、新聞は、「社会のまご」とか、「世界の鏡」とかいわれているのです。

このような役目を持っている新聞の紙面は、どのように構成されているのでしょうか。新聞は、前にも述べたように、政治、経済、社会、文化などの、あらゆる面から記事を選んであります。これらの記事は、それぞれ、まとめているせてあり、それが、その新聞の特色をなしているといふことができます。

次に、新聞を読むとき、大切なことは、見出しによって記事の内容を

知り、必要な記事から選んで読むことです。

新聞の特集記事などには、科学者や文学者の論文や、評論、ずい筆など、参考になるものがたくさんあります。また、珍しい写真や、さし絵、カットなどもついています。小説やまん画その他、いろいろな宣伝文や、広告ものついています。

毎日の新聞によく目を通し、世の進歩におくれないようになりたいものです。

(新漢字判鏡構評考宣)

エチケット

エチケットというのは、フランス語で、礼儀、作法などという意味です。エチケットは、社会生活をするために必要な礼儀作法ということが出来ます。

エチケットは、なぜ必要か、というところを考えてみましょう。ここに、青年がふたりいるとします。ひよりは、身なりは清潔、トンは使いも正しく、礼儀をわきまをていて、態度がいかにも上品です。もうひよりは、目上にも、目下にも、同じことば使いをし、態度に品がなくて、良い感じを与えません。

わたしたちは、どちらの人をこのむでしょう。

エチケットは、社会生活を気持ちよく、なめらかに進めていくため、欠くことのできない油のような物です。油のきれた機械は、ガタガタ、ゴツゴツと、回りにくくなります。それと同じように、エチケットのない社会はかたかたに、ひからびて、とげとげしくなります。

礼儀作法には、社会の動きや、生活の仕方によって、時代と共に変わる部分もあります。しかし、いつの時代にも、どの地方にも通じる共通

の精神があります。

その精神は、一口に言うと、人に対するあたたかい思いやりの心と、他人に迷わくをかけないという事です。

「何事でも、人々からしてほしいと望むことは、人々にも、その通りにせよ」

ということばがあります。その精神が、エチケットの精神です。親切であたたかい心が礼儀の精神で、この精神を持つ人の行ないは、どこでも

(新漢字 潔 態 欠 油 迷)

(35. j a b)

いつでも、人によい感じを与え、社会生活を楽しくします。他人の人格を認めて、それを尊重するとは、民主主義の根本精神ですが、それは、また、エチケットの精神でもあります。

地方や国によって、ことばや風習も異なり、したがって親切心の表わし方も、それぞれ変わりますが、わたしたちは、あいさつや食事作法などの形式も、一応は知っておく必要があります。しかし、『ばかの二つ覚

え」で、ゆう通がきかないようではいけません。豊かな常識をもってその場にふさわしく応用したり、活用したりすることができなければなりません。

どうしたら、豊かな常識を養うことができようか。それには物事を注意深く観察し、良い本を多く読むことです。また、実行して経験を積むことも必要です。そのようにして、身についたことを、エチケットに結びつけて、応用していけばよいのです。

エチケットにそむいたからといって、ばっせられるということはありませんが、社会人である以上、それを心得て、だれにでも良い感じを与え、楽しい社会を作りたいものです。

では、日常生活に必要なエチケットについて、考えてみましょう。

一 あいさつ

あいさつをするときは、笑顔の気持ちを忘れたいものことです。「おはよう」「行って参ります。」「ただ今。」「おやすみなさい。」

など、家庭でのあいさつ。「いただきます。」「ちとつまま。」「など、食事時のあいさつ。その他、外に出た場合のあいさつも、明るく、心をこ

(036. j r a g 挿絵あり)

めてするようになしませう。

二 ことば使い

ことばは 感情と結びついているので、使い方が、なかなかむずかしいものです。丁寧い過ぎてもいけませんし、ぞんざいでは、相手に失礼になります。日本語の敬語は、めんどろなものですが、エチケットを心得ている人は、これを正しく使います。相手の人格を尊重して、目上を敬い、同りようとは親みつに、目下に対しては、いたわりのことば使いをします。ことば使いが悪いため、誤解を受けることのないように気をつけませう。

三 服ぞう

ぜいたくな服ぞうをする必要はありません。清潔できちんとして、人に不快な感じを与えないように、注意すればよいのです。けばけばしい色ざいや、不調和なアクセサリーは、上品がありません。いくら高価な服でも、ボタンがちぎれていたり、ほろびていたのでは、なんの値

うちもありません。その人の身分に応じた、調和のとれた服着ようをするように心がけましょう。

四 立ち居ふるまい

立ち居ふるまいは、おちついて、正しい姿勢を保つように心がけましょう。急ぐ場合や、気分のいらだったときには、らん暴を行ないをする人は、エチケットを心得ない人といえます。

五 ほうもん

ほうもんする場合は、まず先方の都合を聞きます。そして、約々くした時間を守ります。食



正しい姿勢

(新漢字 丁居 姿 暴

(037. jpg 挿絵あり)

事時とか、早朝や夜ふけはさけるようにします。用件を済ませたらいつまでも長居をしないで、先方になるべく迷わくをかけないように注意します。

また、ほうもんを受けた場合には、気

持ちよく出むかえ、相手の用件を聞きま
す。用件については、真心をもって話し、
遠りよや気がねをしないで、意見をほつ
きり述べるようにします。あいまいな返
答をして、あとで相手に迷わくをかけた
いようにしましょう。

六 集会 その他、社会生活

集会の場合、時こくを厳守するように
とは、よく言われることですが、なかなか守られないので、大勢の人が
迷わくします。団体行動では、規律を守り、自分勝手な行動は、つつし
むことです。自分だけがしゃべったり、人のいやがる話や、争いになり
そうな話は、控えるようにし、明るうな集会にするように心がけましょう。
交際は、たがいに尊敬し合い、理解し合うことが根本です。いつでも
どこでも、楽しく明るい交際をすることです。たがいに責任を持ち、人
に迷わくをかけたことが大切です。

公園 げき場 図書館 ホテルなどでは、自分本位に考えないで、規

定は正しく守りましょう。公共物を使用するときは、特に丁寧にあつかい、あとの始末をきちんとします。

乗物内では、他人に迷わくをかけないように注意し、車内をよこした
(新漢字 済 答 厳 守 責 任)

(088.jpg 挿絵あり)

りせず、上品な態度をするように心がけましょう。

借りた物をすぐ返さなかったり、約束を守らなかったり、自分の感情で他人の悪口を言ったり、自分の意気をはっきりと示さず、あいまいな表現をする人は、エチケットを心得ない人といえます。

社会の人々が、みんなエチケットを心得ていれば、楽しい、明るい社会ができ、わたしたちは、気持ちの良い日々を送ることがができます。

さくら さくら

やよいの空は 見わたす限り

かすみか 雲が においぞいずる

いぎや いぎや 見こめかん

川柳(せんりゆう)

一 うたたね

よいとこへ来たとせい高使われる

本ぶりになつて出て行く雨やどり

病みあがり母を使うがくせになり

うたたねの顔へ一まつ屋根こぶき

ねていても うちわの動く親心

いりもせぬ物の値を聞く雨ぞいり

読めぬ字を何という字に読んでおき

(新漢字 志 病)

(039. j. 2. 2)

二 川柳について

川柳というのは、前句づけの上句が独立して、ひとつの短詩として味わられるようになったものです。前句づけというのは、次のようなものでした。初めに、七七調の句が出してあります。この句の上に、他の人が五七調の句をつけ、全体として意味の通る短歌の形にするのです。たとえば、「石にふといは着せられもせず」といふ句が出してあれば、その上に、「孝行をしたい時分に親はなし」とつけます。すると、「孝行をしたい時分に親はなし石にふといは着せられもせず」となります。そのうちに、前句なしに、つけ句だけでも、十分に短詩として味わることができることがわかりました。そこで、つけ句が独立して作られ、川柳と称されるようになったのです。

川柳は、徳川時代の中期 一千七百六十年ごろに起りました。そのころ柄(から) 井川柳という人が、こっけいな句を広めたので、その人の名を取

って、川柳というようになったのです。

俳句には、季節を表わすことばを入れる必要がありますが、川柳にはそんな約そくはありません。川柳の特色は、人情 風俗をとらえ、人間の弱点をつき、世の中の欠点をからかい、そこに、こっけい味を持たせる所にあります。

一時栄えた川柳も、後には下品なものとなり、だんだんおとろえてきました。しかし、近年になって、機知に富み、しかも上品な川柳が広まっています。これは、旧派の古川柳に対して、新川柳と称せられ、現代さかんに作られています。

(新漢字 孝称徳俗欠派)

良い文章を書くには

一 気軽にペンを取ろう

「わたしは、文章を書くのが苦手です。」

「ぼくは、作文がきらいだ。」

などと言う人がいます。その訳を聞くと、書く題材がないとか、どう書き表わしていいかわからないとか、漢字を知らないとか、原稿用紙の使い方がめんどうだとか言います。ところが、話す場合には、いつでも、どこで、どんな事があつたと、話すことができます。話はよくできるのに、書くうとするとき、なぜ、なかなかペンが進まないのでしょうか。それは、話だと気楽にできるが、書くとなると、急に改まった気持ちになつてしまつからでしょう。それに、文字を書くのには、時間がかかります。そして、ことばや漢字が思い出せなかったりすると、覚えていた事がぼやけてきます。このようないふから、書くのがおっくうになるのかもしれない。

もし、話をするのと同じようにつ、すらすらと文章が書けたら、どんな

にうれしいでしょう。それには 無理にしようせずに書こうなぞと力まな
いようです。初めから 原稿用紙にきれいに書こうとしないで、下書
きをやるようでもいいでしょう。そして 数多く書いてみるうちに、いつ
の間にか文章がじょうずになっていきます。

日記 日記は、長く続けてつけることが大切です。その日その日ので
き事ばかりでなく、ときには、詩なども書いてつけるのも楽しいで

(新漢字 苦 訳 力)

(041. jirab)

しょう。

自分の感想や意見を書きながら、反省することは、みなさんが、
りっぱに成長するのに、良い方法であり、それは、人生の貴重な
記録となります。

なお、日記には、生活日記、学級日記、観察日記、飼育日記、
旅行日記、農事日記など、目的によって、いろいろな種類があり
ます。

記録

観察記録というのは、あることから、けい続的に観察し、記録した物です。また、実験した事を書いたものは、実験記録です。

これらは、正確にくわしく書くことが大切です。

箇条書きや、図表なども利用して、わかりやすくする工夫も必要です。

手紙

相手の人には、はっきりわかるように、相手の人が知りたがって

いることを、よく考えて書くこと、要点を落とさないこと、内容

をよく整理して書くことが、手紙では大切です。

二 ふ号の用い方

句(く)とら点

文章を書く場合、句切りふ号を用いないと、意味があいまいになり、とんでもない読みちがいを起こしたりすることがある。それで、句とら点を用いる。句とら点は、次のようなまきまりによって用いる。

(新漢字 貴 箇 条)

。「まゝ」 「白まゝ」 「句点」 などという。

一 文の終わりにつける。

例 1 花がさいた。

2 友たちから手紙がきた。

二 かぎで囲まれている文の終わりにつける。

1 母が、「早くいらつしやい。」と言った。

2 「ことばを大切にしよう。」と、先生がおっしゃった。

三 かぎで囲まれていても、題目、標語その他、引用語にはつけない。

1 花子(はなこ)さんが「はまぐの歌」を歌った。

2 やつぱり「さるも木から落ちる」のことわざ通りだ。

四 かぎを用いないで、ことばや文を引用する場合はつけない。

1 組合創立十周年の式典を、来月一日に挙行するとの通知が

あった。

2 その席上で、功労者に賞状と記念宮印を授与するという話も

あった。

五 簡条書きの場合、各簡条が文の形をしているとき、また、「こと」「まじ」「もの」などで結ぶ場合はつける。

1 日記をつけることには、次のような効用がある。

A 生活に対する注意力を養う。

B 自己反省の資料になる。

C 作文が上達する。

2 入場者は、次のことがらを守ってください。

A 大声でしゃべらなういふ。

B 紙くずを散らさなういふ。

(新漢字 例引創拳賞状授与効己資)

(043. j p a 3)

六 簡条書きでも、事物の名称だけをならべる場合にはつけない。

1 提出書類などを書く場合

A 氏名

B 生年月日

C 現住所

D 職業

「点」「ぶつ点」という。文中の小句切りに用いる。とつ点の用法については、特に厳格なきまりはないが、大体、次のような場合に用いる。

- 一 主語のあとにつける。ただし述語文が比喩的長い場合。
 - 1 わたしは、毎朝六時に起きることに決めています。
 - 2 九月七日、この日を「独立記念日」といいます。
- 二 「」をうつほどではないが、大きく意味が切れる場合。

- 1 計算器はタイプライターのようなもので、計算する数字を表に出し、ハンドルを回すと答が由る仕組みのものです。
- 2 花のさいたかぼちやのつるがはっている駐車場の、のんびりとした様子が、目の前にうかんできます。

三 すぐ下のことばに読けては、意味がまちがってとられる場合。

- 1 きょう、手術をするに決まりました。(決まったのが、きょうのことなのです。)
- 2 大きな、実のたくさんなっているみかんの木をもらった。

(大きいのは、木のこです。)

四「」をつけないと、全滅ちがった意味になってしまう場合。

(新漢字 提職述)

(024 jipab)

あの店で、はぎものを売っています。

五「」をつけないと、文の解釈ができない場合。

すももも、ももも、もも、うれた。

六 同じようなことばがならぶ場合。

1 正子は、健康で、正直で、まじめな少女です。

2 春のピクニック、夏の海水浴、秋の運動会……。

七 次のように、前後している文の場合。

1 「おどろいたね、あのときは。」

2 「だめよ、そんなことをしては。」

八 会話文、引用文などをかぎで囲んだ前後にはつける。

九 かぎで囲んだ文を「と」で受けて、それが名詞に続いた場合は、

「と」の次につける。

- 1 「とようなら」と、ハンカチをふった。
- 2 「帰ってこい」と、父は言った。

黒まる、その他のふ号

「黒まる」「なか点」などという。

一 名称を列記する場合。

- 1 牛・馬・犬・ねこは動物である。
- 2 宗教では、仏教・カトリック教の信者が多い。

二 日付、時などを略して表わす場合。

- 1 一九六三・九・七
- 2 一四・三〇発

三 名称を略して表わす場合。

(新漢字) 積 健康 直宗

(045. jrbg)

1 E・F・C・B

2 E・U・A

四 人名 地名をかなで書く場合。

1 ジョゼー・ボニファシオ

2 リオ・グランデ・ド・ノルテ

「」「かぎ」という。

一 会話や、他から引用したことを、文の中に入れる場合。

『ほんひよりで だいじょうぶです。行きます。』と 道勇(おは
答えました。

二 特に強く言い表わしたい場合などに用いる。

『石の上にも二年』といわれるように……。

『』『二重かぎ』という。

ふじう「」の中に、なつに、かぎを使う必要がある場合。

『そつだよ。『情けは人のためならず。』』といふこともあるか
らね。」

() 「かっこ」という。

文の中のことをばを説明したり、文をさしはさんだりする場合。

1 児童画の展らん会を、来たる十五日(日曜日)まで 延期

します。

- 2 自分の考えを述べるとき、いろいろな述べ方(文章の組み立て方)をするものです。

「ダッシュ」という。

「すなわち」「つまり」などと 言いかえたり、説明したりする
場合に用いる。また、間を置くとか () と同じように使ったり、

(新漢字 児童延)

(新ボル語) Estrada de Ferro Central do
Brasil Estados Unidos America
Jose Bonifacio Rio Grande do Nort
(e)

(046. 1. 12. 2)

心の動きを示すために用いたりする。

…… 「てんてん」という。

省略するとき用いたり、「一」と同じように用いたりします。

また、会話のときの無言を表わしたりする場合にも用います。

- 1 「一、二、三、四……十、みんなぞ十機です。
- 2 「あっ、それは……。」

短い作品

一天国

リンドルフオ・ゴメス

マラザルテは、こっけいないたずらが大きすぎて、さんざん近所の人々をこまらせたり、わらわせたりしていました。このいたずら者のマラザルテも、病気にはかありませんでした。病気が重くなって、とうとう死にました。すると、マラザルテは、まっすぐに天国へ飛んでいきました。天国の門番は、サン・ペドロです。サン・ペドロは、いかめしい顔をして立っていました。マラザルテは、ぴよこりと頭を下げました。「ちよつと、ハンを通してください。」

(新ポル語) Lindolfo Gomes Malazarte Sao
Pedro)

(047. j-p. 22)

「おまえは、だめだ。いたずらばかりしてきて、天国にはいりたくないなんて、よくも言ったもんだ。」

「だけど、天国は、くい改めた者なら、はいれるんでしょう。」

「おまえは、くい改めてなどいないじゃ

ないか。おまえの名まえは、名ほに

無いから、だめだ。」

「まったなあ。それじゃ、ちよつとだ

け、天主様に会わせてください。」

余りにもずうずうしいマラザルテのこ

とばにサン・ペドロは、すっかりおこっ

てしまいました。

「ぼかな」とを言った。天主様にお会い

するには、天国に、はいらなまきやならないんだ。天国という所は、一

度はいったら出られないところなんだぞ。」

「そうでしたか。それじゃ、一目だけでよろしいから、その天国を見せ

てください。お願いします。」

マラザルテが、しつこくこたのむので、忠実な門番サン・ペドロも

うしろひきながら、とびらを少しあげ、のぞかせてやりました。首をつっ

こんで見えていたマラザルテが、とつ然、大声でさげびました。

「あつ、向こうから、天主様がおいでになる。早く見てごらん。」

サン・ペドロはうつかりふり向きました。そのすきに、マラザルテはひよいと、天国にはいってしまいました。

「11500。」

いっばい食われたと知ったサン・ペドロは、すぐマラザルテをとらえ

(新漢字 忠)

(088.jpg 挿絵あり)

天国から外へつき出そうとしました。

「もう、おそいですよ。一度天国にはいった者は、出られないんですよ。もう、おそいですよ。一度天国にはいった者は、出られないんですよ。もう、おそいですよ。一度天国にはいった者は、出られないんですよ。」

サン・ペドロは、マラザルテを天国に置くことにしました。

二 金魚売り

小川 未明 (おがわみめい)

たくさんな金魚の子が、おけの中で泳いでいました。からだ中がすっかり赤いのや、白と赤の おぢや、頭の先がちょっと黒いのや、いろいろあったのです。それを前と後ろに、二つのおけの中に入れて、かたにかついで おぢいさんは、春のさびしい道を歩いていました。

「このおぢいさんは、これらの金魚を、仲買(なかがい)や卸屋(おろしや)などから、買ってき

たではありません。自分で、卵から養成したのでありますから、本当に、自分の子どものようにかわいく思っていたのです。

「これを売らなければならぬとは、なんと悲しいことだろう。」

こう、おぢいさんは思ったのです。

春の風は、やわらかに吹いて、おぢいさんの顔をなぞって過ぎました。道はただには

すみれ や たんぽぽ や あざみ などの花

が、ゆめでも見たからわびびってくるよーい。

(新漢字 魚)

(029. jpeg 挿絵あり)

さうしていました。そして、あちらの野原は、かすんでいました。

いろいろな思い出は、おじさんの頭の中に現われて、わらい声をたてたり、また、悲しい泣き声をたてたかと思うと、いつの間にか、あとかた

もなく消えてしまって、なかに、美しい別の空想が、顔を出したのです。人家のある所までくると、おじさんは

「金魚やい、金魚やい——」

とよびました。

子どもたちが、その声を聞きつけて、どこから集まってきました。その子どもたちは、なんとなぐらん暴そうに見えました。金魚の泳いでいるおけの中にぼうを入れて、かき回しかねないように見えました。おじさんには、そうした子どもたちには、金魚を売りたいとは思いませんでした。

「きれいな金魚だね。」

「ぼくはこいの方がいいな。」

「こい は 川にすんでいるだろう。」

「いつか、ぼく つりに行ったら、大きな

こい がぼくぼく、すくぼくのつりをし

ている前の所へ、ういたのを見たよ。」

「赤かったかい。」

「黒かった。少し赤かった。」

「本当かい。」

「本当だ。」

そのらん暴つな子どもたちは、もう、金魚のこいなんか忘れてしまっ
て、ぼくを持って、戦争(いくさ)を始めたのです。



(050. iridab)

おじいさんには、わらい顔をして、子どもたちがおもしろい気になっている
のをながめていました。がやがて、あちろへ歩いていきました。村をはな
れると、まつ のなみ木の続くかい道へ出たのであります。そのまつ

の木の根にこしをかけて、じつとおけの中にはいついていたくさんな金魚の姿を、ながめていました。

こうして、おじいさんは、自分の育てた金魚は、残らず自の中にはつきりとはいついていたのです。

長い道を、おじいさんにかつがれて、知らぬ町から町へ、村から村へ行く間に、金魚は、自分の兄弟や友たちと、別れなければなりません。そして、それらの兄弟や友たちとは、永久に、また、いつしよにくらすこともなければ、泳ぐこともなかったのです。もとより、自分たちの生まれた故郷の小さな池へは、帰ることがなかったでしょう。

金魚は、何も言わなかったけれど、おじいさんは、よく金魚の心持がわかるようでした。余り長い毎日の旅にゆられて、中には、弱った金魚もありました。そんなのは、別の器の中に入れて、みんなを別にしてやりました。なぜなら、達者で元気のいいのが、ばかにするからです。そのことは、ちよつど、人間の社会におけるのと同じがありません。弱い者に対して、あわれむ者もあれば、かえって、それをあつげりいじめるような者もありました。

おけに鼻を打たれたり、また、ゆられたために弱った金魚を、おじいさんは、いつそうかわいがってやりました。

ある日のこと、おじいさんは、金魚のおけをかついで、

「金魚やい、金魚やい——」

とよびながら、小さな町へはいっていききました。

(新漢字 姿久 故郷器)

(051. jpg 挿絵あり)

そのとき、十二、三になる少年が、と

ある一けこのうらから飛び出てきて、

「金魚を見せておくれ。」

と言いました。

おじいさんは、おとなしい、いい子で

もだと思いましたから、

「まあ、見てくたせう。」

と答えて、おけをおろして、見せました。

少年は、二つのおけの中にはいって



る金魚を、熱心に見比べていましたが、

おじいさんが別にしておいた弱った金魚へ、その目を移したのです。

「このまると、おの長い金魚をくださいな。」

と、子どもは言うまじだ。

「ほうちゃん、この金魚は、いい金魚ですけれど、少し弱っていますよ。」

と、おじいさんは、目を細くして答えます。

「ふうっ、弱っていますの。」

「長い旅をして、頭をおげで打って、しかれているのですよ。」

おじいさんは、やさしく、いっ子どもだと思いつ、見ていました。

「ほく、だいじにっ、この金魚を飼ってやろうかしら。」

「そうっ、くださねば、金魚は喜びますよ。」

と、おじいさんは言うまじだ。

子どもは、まると、おの長い、赤と白のぶちの金魚を買いました。

その外にも、一二匹を買って、家の中へはごうっ、

「おじいさんは、まだ、いっちやっ、いっの。」

と、少年は聞きました。

「また、来年来ますよ。そして、金魚がじょうぶでいるか、おうちへ行つてみますよ。」

と言いました。

少年は、うれしそうにして、金魚を入れ物に入れて、家へはいりました。おじいさんは、かわいがっていた金魚の行く末を思いながら、人よきそんな顔にわらいをたたえて、荷をかつぐと、子どものはいった家の方を見返りながら去ったのでした。

「金魚やい、金魚やい——」

という声が、だんだん遠ざかっていきました。

おじいさんから、弱った金魚を買った子どもは、その金魚をいたわつてやりました。

金魚は、急にみんなからはなれて、さびしくなったけれど、静かな明るい水の中で、二、三の友たちといっしょにおうちへくへんよができたので、だんだん元気を回復してきました。そして、もとのじょうぶなからだど

なつたのであります。

金魚は、水の中から、庭先に、さいたいろいろの花をながめました。また、ある夜は、やわらかに照らす月の光をながめました。自分たちをかわいがってくれたおじいさんの顔は、ふたたび見るとはなかつたけれど、少年は、毎日のように、水の中をのぞいて、えさをくれたり新しい水を入れてくれたり、親切にしてくれたのであります。

夏が過ぎ、秋がゆき、冬となり、そして、また春がめぐってきました。ある日のこと、少年は、外の方に当たって

「金魚やい、金魚やい――」

(053. j pag)

という、よび声を聞いたのです。

「金魚売りが来た。……」

と言って、かれは、すぐに家の外へ飛び出して見ました。それは、心のうちで待っていた、去年、金魚を買ったおじいさんでありました。

顔を見ると、おじいさんはごっころりわらいました。

「ぼっちゃん、去年の金魚は達者ですか。」と聞きました。

おじいさんは、この子どもが、弱った金魚をだいに育てよう、と言
つて、買ったことを忘れなかったのです。

「おじいさん、金魚は、みんなしょうぶで、大きくなりましたよ。」
と、少年は答えました。

「どれどれ、わたしに見せてください。」

と言つて、おじいさんは、庭先の方へ回つて、金魚のはいつている大き
なはち をのぞきました。

「よう、よう、大きくなった。」

と言つて、おじいさんは、別に二匹きの金魚を少年に与えたのです。

「おじいさん、また、来年こつちへ来るの。」

と別れる時分に、少年は、おじいさんを見上げて、なごり惜しそうに聞
きました。

「ほつちゃん、達者だったら、また、参りますよ。」

とおじいさんは、しんみりとした調子で答えました。けれど、必ず来
るとは、言いませんでした。なせなら、おじいさんは、もう、年をとつ
たから、こつちで歩くのは、難きよとなつて、心のうちで、静かな故郷
のた

んぼで、ばらの花を作ってくらしたいと、思っていたからでもあります。

(新漢字 難)

(054 . j p g 挿絵あり)

水と空気

一 水げん地で

きのうは、天気の良い日曜日でした。

はるえさんたちは、先生に連れられて

カンタレイラの水げん地へ遊びに行き

ました。正午近くなったので、青々と

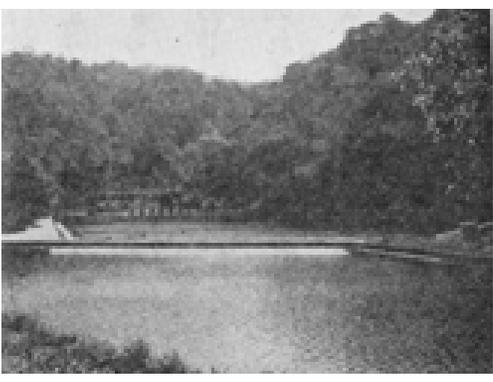
した池を見おろしながら、弁当を食べ

ました。

一休みしているとき、秋子さんが、

とつ然たずねました。

「先生、池の水は、どうして青いんですか。」



先生は、みんなに向かつて言いました。

「秋子さんの質問は、たいそうよい質問だ。それでは、水について、みんなで話しあってみよう。なぜ、池の水は、青いのだろう。」

「池が深いからです。」

正夫君が、すぐ答えました。

「では、深いとなぜ青いのだろう。」

先生が、追いかけるように言いました。だれも答えられなかったので、先生が説明しました。

「いいかね。太陽の光は、七つの色を持っている。そのうち、赤や赤に近い色は、水が吸収する。ところが、むらさみや青は、水が吸収しないので、青く見える訳だ。水は浅い所よりも深い所ほど、青くもく

(新漢字 弁吸 浅)

(新)ポル語 Cantareira

(054-2 .jpg 挿絵あり)

見えるんだ。」

ロベルト君が、言いました。

「油の水面が、まっ平らなのは、なぜだろう。」

「それは、水の性質よ。」

明君がこう言つと、先生が続いて言いました。

「その通り。水の性質にはいろいろあるが、水の表面は、平らにならうとする性質も持っている。この水の性質を利用した道具があるが、知っているかね。」

「知っているわ。水準器でしょう。」

「そうだ。よく知っていたね。」

ジュリアさんの顔を見て、先生はにっこりしました。

今度は、武男君がたずねました。

「公園のふん水が、ふきあがるのは、なぜですか。」

「なぜだろうね。さっき話した水の性質から考えると、わかるはずなん

だがね。」

「あ、わかった。」

はるまさんは、目をかがやかせて、大きな

声を出しました。

「先生、管で水を高い所から、低い所へ送

るんです。すると、低い所から出る水は
高い所にある水と同じ高さになろうとし
て、ふきあがるんです。」

「そうそう。だから、水をためるタンクを、

高い所に置くのは、水を勢いよくふき出

(新漢字) 管

(新)ホル語 Roberto Julia

(055. jap)

させるためなのだ。」

正夫君が、ひとり言のように言いました。

「雨はなぜふるのかなあ。」

「それは、だれか知っているだろう。」

「はい。」

久男君が、教室で答えるときのように、手を上げました。

「雲が冷えると、雨になって落ちるんです。」

「そうだ。もっとくわしく言っていたらいい。」

「雲は、小さい水のつぶつぶまわっています。だんだん重くなって、雨になって落ちるんです。」

「その水のおぶのできる訳を知っているかね。」

と、先生が聞き返しましたが、だれも答えませんでした。

「水の熱くすると、どうなるだろう。」

「お湯になって、湯気がたります。」

「そうだ。それと同じように、地球上の水は、太陽にあたためられて

じょう発する、その水じょう気が、雲になるんだ。」

「雲は、地球から上まへは行かないんですか。」

「ああ、行かないよ。地球の引力に作用されているからね。雨になって

落ち、水じょう気になって、また、空に上がる。こうしたことをくり

返しているのだ。」

それから、しばらく、だれも質問をしませんでした。

「それじゃ、ぼつぼつ、オルト・フロレスタルの方へ出かけよう。」

先生が、立ちあがるうとした時、今まで、だまっていた保君がたずねました。

(056. jpg)

「先生、水は何でできているのですか。」

「水は水だよ。」

武勇君のことは、みんながわらいました。しかし、先生はわらいませんでした。

「これは、少しむずかしい。どんな物でできているか、今度、実験して見せてあげよう。」

みんなは、先生をとり囲むようにして山をくだり、オルト・フロレスタルの方へ向かいました。

(056. jpg 左ページ横書き)

二 空気の成分

はりの底を見せて

「はりの中には何も無いよ。」

「ほぼだよ」

と、言う人があります。でも、本当は

からっぽではなく、空気はあるのです。

空気は、色も、においも、味も無い、すき通った気体で、地球を何百キ

ロメートルの厚さでとりまいています。これを大気といいます。

石や水のように、空気も、地球の引力で引かれているので、重さがあります。その重さは、11(じゅういち)が、およそ1.29gで、水の約800分の1です。

(057. jpg 挿絵あり 横書き)

引力は、地球の中心に近いほど強いのですから、高い所

に行くにしたがい、空気は軽くなります。10kmも高い所で

は、空気はずっと薄く、温度もれい下5〜6度くらいです。

すべての物は、大気の圧力、すなわ

ち気圧を受けています。地球の気圧は

1平方cmにつき、約1kgです。

真空にしたガラス管の一方の口だけをあけて、水銀

の中に空気が立っていると、水銀は管の中におし上げられてきます。これは、管の外側の水銀の面を空気がおしているからです。水銀は、およそ760mmのぼります。それで1気圧とは、水銀が760mmだけ上がる気圧と決めています。それより低ければ低気圧、それより高ければ高気圧といえます。気圧は、多く天候の加減で高くなったり、低くなったりします。

ゴムまりを火であたためるとふくらみ、冷やすとへこみます。それは、空気があたたまるるとふくらみ、冷えるるとちぢむ性質を持つことを証明するものです。では、空気をぐんと冷やしたら、どうなるでしょう。空気をれい下190度ぐらいに冷やすと、液体になります。そして、もっと冷やすと、しまいには固体になります。

昔の人も、空気のあることは知っていましたが、その性質や成分については知りませんでした。

た。200年ほど前、

ランスのラボアジエー

という学者が、「空気は

(新漢字 庄候減証固酸

(058.jpg 横書き)

酸素とちつ素とが混しり合つてできたものだ。」と言い出しました。その後、多くの学者の研究によつて、空気は、ちつ素78%、酸素21%を

おもな成分として、それに1%のアルゴンや炭酸ガスなどをふくむ物だといふことが、わかりました。しかし、実際には、この外に、水分、オゾン、アンモニア、ほりなども混じっています。

人間ばかりでなく、動物はみな、空気を呼吸して生きています。新しい空気を吸つて酸素を取り、代わりに炭酸ガスをはき出します。ところが、植物は、炭酸ガスを取り、代わりに酸素を出しているのです。

酸素は、炭素とよく化合します。火が燃えるというのは、空気中の酸素が炭素と化合して、熱と光を出すことをいふのです。

ちつ素は、酸素とも、炭素とも、また、水素とも、なかなか化合しませ

ん。空気は、ちつ素5分の4、酸素が約5分の1のわりあいできてい
るので、よく燃える酸素も、ちつ素によつて、その燃えやすい性質が、
加減されているのです。

炭酸ガスは、炭素が酸素と化合するときによります。しめきつたへや
で炭をおこしたり、また、人が大勢いたりすると、へやの中に炭酸ガス
がふえます。こんなへやにいますと、気分が悪くなります。

人間は、空気をいろいろなことに利用しています。酸素やアルゴンを
取り出して用いたり、ちつ素を取つて肥料を作つたりしています。

(新漢字 炭呼吸燃炭)

詩三題

一 風 船

マヌエル・ハンディラ

町はずれのフェイラ

風船売りが大声で

——さあ さあ、買った買った 楽しいおもちゃ——

風船売りの回りで

貧しい少年たちが

大きな風船を見つめています

まるい まるい目をして

ぞくぞくと集まってくる

奥さん、むすめさん、女中さん

そして 近所のせんたく女たち

魚売り場

穀物売り場

野菜売り場

女たちは 声あらく値ざつていろ。

青いえんどう うれたトマト

おいしそつなぐだものちんえん

(新漢字 穀)

(新ポル語 Manuel Bandeira feira)

(060. jpg 左pg 横書き)

少年たちの目には

まるで うつらない

目にうつるのは 風船だけ

フェアで たった一つ

絶対になくってはならぬもの

それは風船

風船売りは大声で

——さあ さあ 買った買った 楽しいおもちゃ——

貧しい少年たちは

じっと 風船を見つめている

まるい目をして

(060. jirab)

二 野ばら

近藤 朔風 (いんげんふうせん)

わらべは 見たり

野中の ばら

清らかに さげる

その色 めでつ

あかす ながむ

くれない におう

野中の ばら

たおりて 行かん

野中の ばら

たおらば たおれ

思ひ出ぐさ

きみを ちかこ

くれない ことば

野中の ばら

(新漢字 絶)

(061. japan)

三 た き 火

北原 白 秋 (きたはらはくしゅう)

落ち葉たけばおもしろ

くぬぎの葉はすすすす。

かやの葉はちよろちよろ

まつのかれ葉はばちばち。

ひとりでたく落ち葉を

ひやしで かげばおもしう

山のおいがする

あのころのおいがする。

落ち葉たまたぎ

ひやしであぢいさんの

何かはかなくなりけり。

もひとつ強く燃えようよ。

くぬぎの燃ゆるにおいは

くぬぎのかれしかぞする。

ただそれだけの事とて

うれしや、冬はちみしや。

イザベル王女

一千八百七十一年九月二十七日、リ

オ・デ・ジャネイロの上院では、はげ

しい議論が行なわれていました。ぼう

ちよう席には、たくさんの人々が集ま

って、熱心にそれを聞いていました。

やがて、議論が終わり、投票が行なわれました。しばらくして、議長の

アバエテー子しゃくは立ちあがり、投票の結果を発表しました。その

とき、ぼうちよう席からどつと歓声があがり、美しい花たばがふるよう

に議場に投げられました。議長は、かねを鳴らして、静かにするよう注

意しましたが、かねの音は人々の声に打ち消されて、だれにも聞こえま

せんでした。

この光景を、ぼうちよう席から見守っていた人がいました。それは、アメリカ合衆国から来ていたひとりの高貴でした。やがて、かれは議場に行き、リオ・ブランコ子しゃくは、お祝いの言葉を述べました。そ



イザベル王女

して、ゆかきうずめている花たばの中から、一本の花を拾い上げ、
「子しゃく、わたしはこの花を、わたしの国に送りたいと思います。」

わたしの国で、たくさんの血を流して、やっと決まった法令が、この
国では、どのようなにして決められたかを知らせるために……」

と言いました。

リオ・ブランコ子しゃくは、すぐに、イザベル王女の所へかけつけま
した。かれの来るのを待ちかねていた王女は、あらためて議会の様子を

(新漢字 議 票 声 衆)

(新ポル語 Isabel Abaete Rio Branco)

(063. j-p 34)

聞き、喜びに顔をかがやかせて言いました。

「おめでとう。あなたの働きは、政治家のお手本です。本当に、ありが
とう。」

「もつたいないおこぼれです。わたしが勝ったのも、みな、王女様のお
力ぞえと、多くの人が、わたしを助けてくれたからです。」

ふたりは、喜びを分けあって、しばらく語りあいました。

この日、上院では、ベントレ・リブレ法案に対する最後の投票が行なわれたのでした。三千八人の議員中、四人が反対しただけで、この法案は議院を通過しました。そして、次の日、九月二十八日に、このベントレ・リブレ法案は、ブラジル全土に発布されました。

ブラジルでは、早くから、どれいを解放しようという運動が起こっていました。しかし、大農園主、大商人、政府の高官というような強い権力を持つ人々の中に、反対する人があつて、どれい解放を、法令として発布することが容易にできませんでした。

皇帝ドン・ペドロ二世も、フランスの有名な作家や詩人たちから、どれい解放を勧める手紙をもらったとき、

「サンタ・クルスの地に、どれいはひとりもない、と証明できる日と、わたしほど待ちかねている者はないだろう。」

と、かたわらの者に語りました。皇帝の力をもつてしても、なかなかできなほど、それは困難な仕事でした。

イザベル王女は、一千八百四十六年七月二十九日、皇帝ドン・ペドロ二世、皇后アレザ・クリスチナの第二王女として、リオ・デ・ジャネイ

(新漢字 権帝勸困后)

(新ポル語 Ventre Livre Dom Pedro Santa Cruz)

(964. j. p. 3)

口に生まれました。そして、一千八百六十四年、デウ伯(はくしやく) Condé

d. E. U.)と結んで、三王子の母になりました。

父皇帝が、ヨーロッパに旅行中、二度皇帝に代わって政治をしました。その間に、国境問題を解決したり、外国との通商をさかんに行ったり、いろいろブラジル発展のためにつくしました。中でも、もつとも王女が心をかたむけたのは、どれい解放でした。

後年の歴史家は、「もし、イザベル王女がいなかったら、ブラジルのどれい解放は、あれほど早く、しかも円満にはいかなかっただろう。」と書いています。

イザベル王女の性質は、祖父ドン・ペドロ一世によく似ていました。気性がはげしくて、正義と自由を愛し、恐れを知らぬところなどは祖父そっくりだと言われます。政府の高官たちから、政治上の意見を聞くときでも、その意見が、人間的な愛情を根本としたものでなければ取りあ

げませんでした。そして、自分が正しいと思うことは、どんな困難に会っても、一歩もひかず、つらぬき通しました。

王女は、限りなくブラジルを愛し、国民の幸福を願いました。そして、ブラジルを一日も早く、ヨーロッパの文明国とたたをならべりつぱな国にしたいと望みました。

カストロ・アルベス、ルイス・ガマ、ジヨアキン・ナブコ、ルイ・バルボザなどの有名な人々がリーダーとなり、どれい解放運動は、ますますさかんになりました。幼いころから、どれいに同情を寄せていた王女は、心ひそかに、この運動が実を結ぶことを願っていました。

父皇帝に代わって政治をするようになってからは、どれい解放に心を注ぎ、当時、どれい解放の主唱者であったリオ・ブランコ子やくを助

(新漢字 性)

(新ホル語) Castro Alves Luiz Gama Joaquin NABUNCO Rui Barbosa

(005. jpg 挿絵あり)

けて、ベントレ・リブレ法案を議会に提出

させました。これは、どれいの全面的な解放を宣言した一千八百八十八年五月十二日
發布のアウレア法令の土台となった法案で
す。これが、法令として發布されたとき
その日以後に生まれるどれいの子どもは、自由の人である、ということ
を決める法案です。

このベントレ・リブレ法案が議会で提出されてから、議事では、賛成
と反対の議論がはげしく対立し、議事を中止するよう主張しはじめまし
た。国民も非常な関心をもつて、その成り行きに注目しました。

リオ・ブランコ子しゃくは、たびたび王女をたずねて、議会の様子を
報告し、法案の通過が容易でないことを申しあげました。王女は、いつ
も、最後の勝利を信じて、リオ・ブランコ子しゃくをほげましました。
子しゃくは、王女にはげまされ、信念を固め、五か月も続いた解放への
戦いに打ち勝ったのでした。

リオ・ブランコ子しゃくが帰ったあと、王女は、祭壇の前にひざま
づいて、このことを喜びました。

「神様、あわれなどれいのたちをお助けく

ださい。どれいたちのために身を投げ
出して戦っている人たちをお守りくだ

さい。」

王女は、なみだを流しながら、いつまで
もいのり続けました。

この王女のいのりと、リオ。ブランコ

(新ポル語 Aurea)

(096.jp.dam)

子しやくを中心とする人々の働きとによって、ブラジルのどれい制度は
なくなりました。しかし、このどれい解放は、ブラジルが、帝国から共
和国へと変わっていく、下準備ともいわれるべきものでした。

ブラジルは一千八百八十九年十一月十五日、共和国になりました。イ
ザベル王女は、家族と共に、愛するブラジルを去ってヨーロッパへ行き
ました。そして、一千九百二十一年十一月十四日、パリでなくなりました。
死ぬ日までブラジルを愛し続けた王女を敬い、王女のをがらをたた

えて、ブラジルは、一千九百五十二年に、そのなまがらをパリからリ
オ・デ・ジャネイロに移し、丁ねいにまつりました。王女の正式の名は
「イザベル・クリスチナ・レオポルジナ・アウグスタ・ミカエラ・ガブ
リエラ・ラファエラ・ゴンザガ・デ・ブラガンサ」といいます。

「自分」について考える

一 人の値うち

自分のしたことを、人から誤解されるのは、だれにしても愉快なこと
ではありません。まして、そのために、人から非難されたりすれば、不
愉快を通りこして、はらがたつてきます。そして、言い訳をしたくなる
のが人情です。しかし、言い訳というものは、それをした方がよい場合
と、しない方がよい場合があります。

父母、兄弟、また、なかの良い友たち、そういう親しい間からの人た
ちとさえ、わたしたちのしたこと、言ったことを、まづがえて、悪く取る
ことがあります。こゝろいう場合には、誤解を残しておかないように、よ

(新ホル語) Leopoldina Augusta
Micaela Gabriella
Rafaela Gonzaga Braganca

(067. j p 23)

く説明をしなければいけません。

ところが、大ぜいの友だちや、世間の人々が、わたしたちについていろいろ言うことがあります。それが耳にはいつても、いちいち言い訳をしないで済ませるようにならないといけないのです。大ぜいの人を相手に、言い訳をしていたらきりがありません。そればかりでなく、言い訳をせずにはいられない気持ちだが、もつと大切なものあることを忘れさせてしまう危険があるからです。

わたしたちは、できるだけ、人々の誤解を招かないように努めなければなりません。しかし、わたしたちにとつて、かんじんなことは、自分のしたことが、本当にまちがっていたかどうか、ということでは、他人が、それをどう見るか、ということではありません。だれでも、自分分は、他人からどう思われているか、ということでは、気になるものです。しかし、余りそれを気にする人は、他人の気持ちにばかり心を使つて

本当の自分が、どんな人間か、ということを知れ勝ちです。

世間には、えらそうに見られたい、金持ちらしく見られたい、……など、他人の目によく見られようとしている人が、たくさんあります。当人も、世間も、それにだまされていく場合が、少なくないのです。しかし、考えてみれば、こう鉄が、多くの人からなまりだと思われても、それで、こう鉄がなまりになる訳ではありません。また、なまりが、こう鉄だと思われても、なまりは、どこまで、なまりです。こう鉄をなまりだと思うのは、そう思う者の誤りです。また、なまりが、こう鉄だといわれても、それは、なまりの名にはなりません。ですからわたしたちは、人から受ける評判や、うわさに対して、いちいち言い訳をしないでいられる人間になりたいと思います。

(新漢字 危険 努)

(088. jipang)

そうやってこそ、自分のしななければならぬ仕事や、果たさなければならぬ責任も、果たせるようになるやと思います。

京子は、学年の終わりに出す文集の編集委員に選ばれた。外に、次郎、正、秋子、文字らが選ばれ、五人は放課後、教室に残った。みんなから出された作文を、一編一編丁寧に読んで、まちがった字を直したり、全体の配列を考えたりするのが仕事だった。

京子は、自分が受け持った作文を前にして、しばらく、過ぎ去った一年を考えた。長かったような、短かったような一年だった。

はじめの作文は、新学年になったときの希望と不安、そして、今の気持ちを書いたものだった。ピクニックや見学のときのこと、夏休みのこと、きのことや、運動会、学芸会、フットボールや野球の試合のことなど、行事の思い出が多かった。

ふと、目に止まったのは、和男の作文だった。

結局、ぼくのたてた冬休みの計画には、無理があったのだ。これから、勉強と遊びとのわりぶりに留意して、無理とむだのない計画を立てるようになりたい。」

と結んでいた。また、こんなのもあった。

「試験がいやでたまらない。それは、試験勉強がちつとも計画通りにできなからだ。家に帰ると、いろいろな手伝いをさせられるし、勉強も予定した時間内に終わらないことが多い。それで、試験に、思ったような点数がとれなくて、くやしいことが多い。」

(新漢字 課 留

(88. j. pag

京子は読んでいて、本当にそうだと思った。

委員は、それぞれ一生けん命 作文に見入っている。次郎は辞書をめくって、字を調べている。

文字の作文が出てきた。文字は、小使い帳を二年間つけて、お金の使い方をいろいろくふうしている。京子は、感心だなあ、と思った。自分は、どうだったろうか。先生に言われて、初めの二、三か月は、どうにかつけたが、あとはつけなかった。

洋子の作文は、病気になった二枝子を、ずっとなくさめはげましている美しい友情の記録だった。

京子は、作文を読み終わって、みんなと、次の仕事の相談をしてから

家に帰った。夕食の時、京子は父に言った。

「わたし、みんなの作文を読みながら、感心したわ。みんな、この二年間をふり返って、いろいろ反省しているんですけども。」

「それは感心だ。反省することは大切なことだ。反省することによって人は、よりよくなるのだ。」

と、父は言った。

三 自分を大切に

非常に重い病気をしたり、大けがをしたりして、幸いにも助かった人たちは、自分を大切にしようという気持ちが強いでしょう。みなさんは、自分を大切にすることとを、どのように考えていますか。

これは、ある学校の生徒たちが書いたものですが、これをもとにして、わたしたちも考えてみましょう。

(新漢字 友)

(OTD・jra)

A 自分を大切にすることとは、今まであまり聞いていない。し

かし、考えてみると、いろいろ思い当たる「ことがある。

学校へ行くとき、おそくなったりすると、危険な「とは知っていても、線路の上を走ったり、工事場の中を通ったりしていく。また、悪いことをして、父にしかられたとき、家を飛び出し、夕方になっても帰らなかったことが二、三度あった。いつも、祖母がさがしに来てくれた。家にはいるとき、父母が心配顔をしているので、悪かったなと思うのだが、二、三日もすると、その気持ちはどこかへ行ってまた、むらやをやつてしまう。

健康に、よく気をつける。むらやや、不注意な行ないをして、自分の命

を、そまにしないように、これが、自分を大切にすることです。

B、ある日、友たちが話をしているとき、わたしが何気なく口を入れたら、友たちが、「まあ、あんな「を言つわ。」と言いました。わたしは、何もそんな意味で言ったわけではありませんと、弁解しました。しかし、だれも信用してくれませんでした。それから、わたしは、人のきつうような「を言つようになつてしまいました。ある日、先生がわたしに、なぜそんな「を言つのか、と言われましたので、今まで

のことを話すと、先生は「もっと、自分を大切にして、すなおな子
におなりなさい。」と言われました。そのとき、いろいろな先生から話
を聞いて、自分を大切にしなければいけないと、つくづく思いました。
この作文では、自分を大切にするということば、自分をすなおにしてい
くことだと、反省しています。ところが、自分だけを大切にするという
ことばは、よくないことばだと言つ生徒もあり、また、そつすることも、や

(新漢字 粗末

(OTL. 11 page)

むを得ないことばではないかと、言つてゐる生徒もあります。

Ｃ、…生存競争のはげしい今の社会では、他人のことなど考える余地
はない。自分が、会社に勤めたとすれば、きつと自己本位の人間にな
るだろう。たとえば、会社の出勤時ぐにおくれないように、先を争
つてバスに乗るだろうし、仕事のことでも、自分の成績だけをあげる
ようにするだろう。

この生徒は、今日のような生存競争のはげしい世の中では、自分本位に

なるのもやむを得ないだろうと、述べています。

自分を大切にすることとは、私利を図り、私欲に走って、ずるく生きようとする気持ちや、悪いことをしようとする、自分の態度まで許すことではありません。

自分を大切にすることとは、自分をよりよくしようとする、とあるいは、自分を止しへのばせようとする、とです。悪い方へいこうとする自分の気持ちを否定して、良い方へいこうと努力する生き方です。

D、わたしは、まず初めに、すべてのことを、自分の良心に相談します。そして、自分が正しいと思うことを実行し、みんなと、はげまし合っていきたいと思います。こうすることが、自分を大切にすることだと思っています。

自分を大切にするには、なによりも、自分の生命を大切にし、そして、自分が、かけがえのない人間であることを自覚しなければなりません。各自が、みんなのためになる仕事をし、力を合わせて、世の中をよくしていかなければなりません。

(新漢字 存 勤 勤 私 函 許 否 覚)

(072 . j . pag)

フットボール試合

B市には、現在、TとCの二つのフットボール・クラブがある。この二つのクラブは、公式試合を年一回ずつ行なうて、ことし、七年目をむかえた。初めのころ、試合はCクラブの勝利に終わっていたので、市民の関心もうすく、観衆も少なかった。ところが、近年になって、Tクラブの実力がめきめきとつき、勝敗は予想できなくなつた。こうなると公式試合の人気は高まり、試合当日には、観衆が球場につめかけるようになった。

ことしの六月に行なわれた試合では、Cクラブが勝つた。この試合のとき、Cクラブの選手に反則があつたとか、なかつたとかで、球場ははちのすをつついたよつなごわざになつた。一時、試合が中止になつたりして、大変なことであつた。そして、わずかな差で、Tクラブが負けたので、ファンの落たんは非常なものであつた。

きのう、十二月の第一日曜日、定例の試合が行なわれた。勝敗の予想もつきかねる所に、計り知れない興味があつた。

試合開始の合図と共に、息づまるような熱戦がくり広げられ、今度はわずかな差で、Iクラブが勝った。

「とにかく、きょうの試合はもらったな。」

(073. j. 1. a. 3)

「そうはいかないよ。今、マウロの調子、すごくいいんだから。」

「ああ、あのメイア・ジレイタか。だけど、こっちのエリオの守備は、

絶対だよ。」

「いや、ぼくの方が。断然うちが勝つよ。」

朝、顔が合ったとたん、ぼくと兄は、もう、ゆうべの続きを始めてしまった。兄は、Cクラブの熱心なファンで、ぼくはIクラブのファンである。どちらも、負けてはいない。

昼食を済ませてから、ぼくは、となりの道夫君といっしょに、球場へ出かけた。良い席を取るために、少し早目に家を出たのだが、もう、球場には、大勢の人がつめかけていた。

試合は、午後一時から始まった。前半戦は、両チームとも、無得点のまままで終わった。十五分間の休けいがあつて、後半戦が始まった。

午後二時、しん判が鳴らすゑの音が、場内にひびきわたった。最初、Tチームは、Cチームの策動に引きずり回されているようであつた。Tチームの選手たちは、なんとなくおちつきを失つているように見えた。いく度か、点を取られそうになり、ファンをほらはらさせた。

セントロ・メジオは、大山という日系の青年である。守備のうまいことで知られている大山も、メジオ・ジレイトのロベルトも、メジオ・エスケルドのミルトンも、うろつろつしてたよらない。それにつけこんで、Cチームは、はげしくせめたてた。Cチームのジアンテイロたちは、す早く位置を変えながら、たくみにボールをパスして、Tチームのゴールにせまった。だが、Tチームも、せめこまれてばかりはいなかつた。ポンタ・エスケルダのエイトルが、頭で打ちこんだのは、てつきりゴールと思われたが、Cチームのゴレイロにさぶきられてしまった。

(新漢字) 得分策

(新) 語 語 Mauro media direita Helio centro
medios medidores Roberto
mediosquero Milton dianteiro
gol pontaesquero 解説不可能

こうして、十数分過ぎると、Cチームは、ますます調子がよくなり、総こうげきに移った。セントロ・アバンテのジョンは、競技場の中央に出、力いっぱいけつて、ボールをカブラルにわたした。ボンタ・ジレイタのカブラルは、それをゴール近くにいたパウロにわたした。メイア・エスケルダのパウロは、Cチーム一の名選手といわれている。パウロは、あつという間に、ボールをゴールに入れ、Cチームは、最初の一点を取った。

Cチームに、まず一点を取られたことが、Tチームを奮起させたのか、動きは急に活発になってきた。「やあぞ。」と思っている



と、果たしてこの勢に転じ、息つくひまもないほどせめたてた。メイア・エスケルダのゴンサルベスが、ラインぎわからけつて、パウロにボールをわたした。パウロは、Cチームのゴレイロのエリオが、前方に出た

すきをねらって、ボールを上げ上げた。ボールはエリオの頭上をこえて、ゴールの中に落ちた。一対一。さあ、同点だ。

ぼくの回りから、歓声とはく手がわきあがった。ぼくも道夫君も、手がいたくなるほど、はく手を送った。

同点になってからのTチームは活気にあふれ、その奮どうぶりは、見ちがえるようであった。ポンタ・ジレイタのルイス、セントロ・アバンテの青木は、パウロの持っているボールを見張って、すきがあれば、うばい取ろうとしていた。後方にいたゴンサルベスは、ゴールの正面から、こつげきを加えようと、前方に出ていった。この戦法は、Cチームの守

(新漢字 奮 頭)

(新ボル語) centro avante Joao Cabral pontadireita Paulo meia esquerda Goncalves Luiz)

(075. jpa)

備を大いにおびやかした。Tチームの守備は、完全に立ち直り、形勢は逆転した。ロベルト、大山、ミルトンは、すきのない構えを見せている。左右のザゲイロたちも、各自のポジションを固く守り、敵のこつげきを片はしからはね返していった。足の速い青木は、じゅう横にかけ回って

敵をなやました。Tチームは、完全にCチームをおさえて、試合を有利に運んでいた。しかし、Cチームも、伝統的なねばりを見せて、なかなかゴールに寄せつけなかった。パウロは、しばしば、Tチームの固い守りを破って、得点のチャンスを作ったが、グランデ・アリアをぬき、ペケナ・アリアにせまるまでにいかなかった。

Tチームも、名手エリオをせめ落とすことは、なかなかむずかしかった。Cチームのザゲイロの吉田、ベネジットの働きもめざましかった。この間に、ファルタ、ペナルチなど、いくつかの反則が両チームにあったが、無得点のまま、時間は過ぎていった。

終わりに近くなってから、Tチームは、もっぱらフステイラ戦法を取り、側面からのこうげきに全力を注いだ。この戦法は、敵の守備をみだすのに効果があった。Cチームは、主要こうげき手のメリア・ジレイタの中山と、カブラルを後退させ、守りをいつそう固めた。

エイトルからボールを受け取ったマウロは、ゴール右側近くまで力走していった。しかし、ボールを入れる余地のないことを知ると、ゴール正面に走り出たエイトルに、す早くボールを送った。エイトルは、すこ

い勢いで、ゴール目ざしてボールをけた。

「ゴール。」Tチームは、さらに一点を加えた。われるような、ぼく手と、球場をゆるがすような歓声がわきあがった。

Cチームは、やっきとなって反けきに出たが、得点のチャンスにめぐ

(新漢字) 逆構敵横破側走

(新ハル語) Zagueiro grande area pequena

area Benedito 解読不能 rasteira)

(076. jpg 挿絵あり。左pg上段 下段あり)

まれず、ついに規定の時間が過ぎ、試合は終わった。

勝った。勝った。

ぼくは、飛び上がった。喜んだ。

道天君といっしょに球場を出たとき、兄と会った。

「おめでとう。」

「ありがとう。」

ぼくたちは、楽しく語り合いな

がら帰った。

放送劇(ほうそうげき)

ウィリアム・テル

(上段)

(音楽・歌げき「ウィリアム・テル」序曲)

語り手 雪をいただいて銀色にかが

やくアルプスのみね。満々と水

をたたえた湖は、まだ朝もやに

包まれ、静かにねむっています。

平和な国スイス。しかし、この

スイスにも、今までに、悲しい

ことや、苦しいことがたくさん

(下段)

ありました。

今からおよそ七百年前

そのころスイスは、となりの国

オーストリアの領地にされて

悪い法律や、重い税金に苦しん

でいました。しかし、人々は苦しみにたえて、スイスの独立と自由のために、強く生きてきたのです。

これは、そのひとつ、ウイリアム・テルの物語です。

（音源終わる。遠く つのぶんの音）

（新漢字 税）

(077. jpg 上段 下段め)

（上段）

ワルター（遠く） おとうさん。おと

うきーん。

テル おーい。なんだあ、ワルター。

（遠くから走ってくる足音）

ワルター おとうさん ほら、い
んよ。

テル どうしたんだい。そのりんご。

ワルター ぼくが、い落としたんだよ。

テル ほう。いちばん下のえだにっ

いてたりんごだっけ。

ワルター ちがうよ。いちばんてっ

ぺんだよ。いつか、おとうさん

(下段)

がい落としたのより低い木だけ

ど。ぼく、このゆみを作って

前から練習していたんだ。

テル (わらって) そうか、そうか……

だけど、ひつじの世話を るす

にしてはいけないぞ。さ、そろ

そろ帰ろうか。

(ふたりの足音)

ワルター おとうさんのゆみ、持た

せて。鳥 きょうは、ずいぶんど

れたね。一、二、三、四…。

ねえ、おとうさん。こんど町へ

(上段)

これ、売りに行く時、ぼくも連れてってね。

テル よし、連れてってやろう。

ワルター わあ、いいなあ。うれし

いなあ。

(とび回りながら歌う。)

“ゆみややを手にして山また山を、

とぶよかけるよ木の間をぬって

えもの見つけりや風より早く、

やの行く限りはおいらの世界”

(音楽 右のメロデー。)

語り手 アルプスのりょうし、ウ

(下段)

イリアム・テルと、その子ワル

ター、かれらが行くこうと言って

いる町では、そのころ……。

(音楽がとぎれると、小だいの音。町の人の

ちむめき。)

声1 なんだ、なんだ。あのさお

の先についているのは。

声2 ぼうしだけ。

声3 変な古ぼけたぼうしじゃな

いか。

番兵 静かにしろ。これから、代

官グessler様のご命令を読みあ

(078. j.p. 上段 下段め)

(上段)

びろ。つっしんぞうけたまわ

ね。

『ハのほいこは 代官のほい

こども。ハのほいこに対し

ては、代官に対すると同じよ
うに、ひざを曲げ、ぼうしを
ぬいで敬礼せよ。命令にそむ
く者があれば、その者は、直
ちに首をはね、財産を、ぼっ
収するであらう。』

(小だいの音、遠くから。人々の不満の声)

ー間ー

(下段)

(右たたみを行くふたりの足音。音楽。)

(「ゆみやを手にして」のメロデー。それが、

ワルターの歌声に変わる。歌声、急にやむ)

ワルター あれ、なんだろう。おと

うさん。ほら、あのまのおの先に

変な物がある。

テル、ぼうしらしいね。

ワルター あ、からすがついでら

あ。ははは、おかしいな。

テル しつ、番兵が、こっちを見
ている。さ、早く行こう。

(番兵が近づいてくる足音)

番兵 待て。止まれ。止まれ。

(上段)

テル あぶない。そんな やりを…

何か、ご用でしょうか。

番兵 きさまたちは、代官様のこ

命令にそむいた大罪人だ。こつ

ちへ来い。

テル ま、待ってください。なぜ、

わたしたちが……。

番兵 きさまたちは、この代官様の

おぼろしを拝まなかつたらう。

テル 知らなかったんです。つい、

話にもちゆうになつて……。

番兵　だまれ。おれは たしかに

(下段)

この目で見たんだ。きさまたち

は、このおぼろしき霧して大

声でわらっていたじゃないか。

さあ来い。きさまのようなやつ

は、打ち首にしてやる。

ワルター　ごめんなさい。ぼく本

当に知らなかったんです。今か

ら、何げんでも おおじぎします

から……。

番兵　うるさい。どけ。

(ワルター、つきたおされる。悲鳴)

テル　何をするんです。小さい子ど

(新漢字 曲直財罪 拝悲鳴)

(上段)

もい……。

番兵 こいつ、手向かう気か。こ

いつめ、こいつめ。

(はげしく、むち打つ音)

ワルター おとうさん おとうさん。

だれか来て……。

(人々のざわめき。テルに同情する声。ラッパの音。)

番兵 さがれ、さがれ。ゲスラー

様のお出ました。

ゲスラー だれだ。わしの命令にそ

むいたのは。

番兵 ははっ。代官様 罪人はこ

(下段)

こいつめでんやいます。おほっし

を見てあちわらい、敬礼するぞ

ころか、石でも投げつけそうに

するのです。

ゲスラー ふん。名まえは。

テル アルプスのりょうし、ウイリ

アム・テルと申します。

ゲスラー その方は、代官に手回か

う気か。

テル いいえ。決してそんなこと

は……。

ゲスラー では、なぜわしのぼうし

(上段)

に敬礼せぬのだ。代官にそむく

ことは、わがオーストリアの国

王陛下にゆみをひくのご同(ご)じ」

とだ。」

ワルター ぼくが悪かったんです。

お代官様 おとうさんは、ちっ

とも悪くないんです。

テル ワルター。

ゲスラー テル、これは、その方の
子か。

テル はい。ワルターと申します。

ゲスラー ふん。(急にねこなで声で)

ワルター、おまえの父は、ゆみ

をいるのがじょうずか。

ワルター はい。おとうさんは、ア

ルプスーのゆみの名人です。百

歩はなれた所から、木のてっぺ

んのりんごを、い落とすことだ

ってできるんです。

ゲスラー おお、そうか。(ふきみにわらって)

テル、一つ、わしにも、そのう

でまえを見せてくれぬか。

テル いえ、とても……。

ゲスラー 遠りよするな。さあ、り

(新漢字 陸)

(00. jpg 上段 下段あり)

(上段)

んこの実を、いてみよ。

ワルター おとうさん、やっつてら

んよ。

テル では、せつかくのお望みで

すから……(やを取り出す。)

ゲスラー よし、やれ。ただし、そ

のりんこの実は、せがれの頭の

上に乗せるのだ。

テル えっ。

(人々のおどろきといかりの声。)

テル お代官様、どうか、それだけは

はお許しください。もし、い損

(下段)

じたら、ワルターの命がありません。

せん。どうぞ、お代官様……。

ゲスラー それ、者ども、急いで用

意をいませ。

(人々のざわめき。不安を表わす音楽。)

語り手 おそろしいことです。代官

のけらいたちは、テルのうでか

らワルターを無理に引き放し、

広場のまん中にあるぼだいじゅ

の下に立たせました。そして、

そこから、百歩はなれた所に、

くつきりど、白い線が引かれま

(上段)

した。

ゲスラー それ、りんぐだ。これを

小ぞうの頭の上に乗せるのだ。

ワルター (遠くから) おとうさん、ぼく

平気だよ。しつかりね。

声1 えらいぞ、ワルター。

声2 神様 どうぞ、あの子を助

けてください。

声3 ああ、われわれは 目の前

でいんなびどろいよをきかして

るのに、じつと見ていなければ

ならないのか。

(下段)

ゲスラー さあ、用意ができたぞ。

テル、早くしないか。

(むちが うなる。不安を表わす音楽。)

テル できません。できません。

このむねを、一思ひごとくきかして

てください。

ワルター (遠くから) おとうさん。早

く、こつぱいよ。きこえのびん

に当たるよ。ぼく、石みたいに

じっとしているから。

テル おお、ワルター。よし、お

ようせいにはおんがよ。

(新漢字 放

(080-2. jpg 挿絵 上段 下段あり)

語り手 テルは、そう言つと、何を

思ったか、やづつから、もう一

本のやをぬき取り、す早く上着

の下にかくしました。

かれは、じっとねらいをつけ

ます。りんごが、まるでまめつ

ぶのように小さく見えます。テ

ルは、一本のやに、あらん限り

の願いをかけて、ねらいを定め

ました。

(音楽とぎれる。やの飛ぶ音 人々のさわぐ声)

テル 当たった。

ワルター (遠くから走ってくる足音) おどろ

さん、よかったね。ほら、りん

このまん中に当たったよ。

(人々の喜びの声)

ゲスラー 待て、テル。その上着の

下に、やをかくしているな。

テル は……、いえ……、

ゲスラー かくすな。わしの目がこ

まかせると思うか。さあ、申せ。

それは、なんのための やだ。

テル これは二のやと申しまして、

やをいる作法のようなもので。

(下段)

ゲスラー なに、作法なら、なぜそ

れを上着の下にかくした。正直に申してみよ。命を取ろうとは言わぬ。

テル　きっと命はお許しくださいますか。それなら申しあげます。

万が一、うでがくるってワルタ

ーを殺したときは、このやで

代官様のむねをいぬぎ、かわい

いわが子のかたきを討つつもり

でいきました。

ゲスラー　ふん、さようか。いかに

(新漢字 討)

(081. jpg 上段 下段あり)

も約そく通り、命だけは助けて

やろう。だが、代官を殺そうと

した不届き者を、そのままにし

てはおけぬ。者でも、こころ
をしばりあげろ。ききまのよう
なやつは、一生、土ろうにほう
りこんでやる。さあ、けらいど
も、ウイリアム・テルを船でし
るまで運ぶのだ。

ワルターおとうさん…おとうさん。

（人々のさわぐ声。そして、それがはげしい波
の音に変わる。あらしが、しだいにはげしく
なる。

（下段

語り手 テルをしろへ運ぶ船には、
ゲスラーが乗りこみ、湖をわた
っていきましたが、とつ然あら
しが起こりました。ゲスラーた
ちが、あらしに気を取られてい
るすきに、テルは、あれくるう

湖に飛びこんで しゅびよく

のがれることができました。

(あらはしだいにおさまり、朝になる。明るい朝を表わすなやかな音楽。小鳥の声。)

語り手 岩かげから、たくましい

男が、ゆみを片手に、山道に飛

(上段)

びおりました。そして、するど

くあたりを見回します。ウイリ

アム・テルです。テルは、いつ

たい何をしに、こんな所に来た

のでしょうか。

(音楽終わる。)

テル (ひとり言) ゲスライは、きつと

この山道を通るにちがいない。

もう、来そうなものだが……。

（テルが、木のしげみにはいる音。遠くラッパの音。大勢の兵隊の足音。馬のひずめの音近づく）

テル おお、来たな。きょうこそ

正義の力を見せてやるのだ。

（下段）

（やの飛ぶ音）

ゲスラー ああつ。

けらいたち お代官様。ゲスラー様。

テル（大声で） 代官を討つたのはお

れだ。ウィリアム・テルだ。天

に代わって悪人をほろぼしたの

だ。

（新漢字 屈）

082. jpg 右pg上段、下段あり。左pg横書き

（上段）

（音楽 勇ましく、力強く。）

声1 テルが代官を討ったぞ。

声2 それ、テルに続くんだ。

声3 進め、一步も退くな。

声4 しろが落ちたぞ。

声1 となりの州の代官も、つか

まったぞ。

声2 大勝利だ。この国に、悪い

代官は、もう、ひとりもない

んだ。

声3 自由だ、自由だ。

声4 祖国スイス、ばんざい。

声 大勢 ばんざい、ばんざい。

(かね鳴りわたる。しだいに大きく。)

語り手 今こそ、スイスに新しい夜

明けがやってきたのです。人々

の努力は、なお続けられました。

親から子、孫へ。祖国の自由と

平和のために努めました。百年

…、二百年…、三百年…

そして、今日のようなスイスの

国が、築きあげられたのです。

音楽 歌げき「ウィリアム・テル」終曲

からだを じょうぶに

1 人間のからだ

人間のからだは、どんな組織になっているのでしょうか。大きく分けると、骨、きん肉、皮ふ、神経及び内臓ごとになります。

人間のからだも、他の動物と同じように、肉眼では見えないほど小さな細ほろの集まりによってできています。細ほろは、細ほろ質と、その中に含まれている核(かく)とによって成りたっています。

細ほろの集まりといっても、ただ集まっているのではありません。同

じような構造を持ち、同じじような働きをするものが、規則正しくならん
でいるのです。これを細ほう組織といいます。

(新漢字 退組織骨皮

(083. jpg 挿絵あり)

組織には、次のじような種類があります。

皮ふの外側を作っている上皮組織 器官
を結びつけている結合組織 細いすじで
できているぎん組織 細長い神経のすじ
できている神経組織などです。

これらの細ほう組織によつて組みたて
られているからだも、外ら見たところ
ではかん単ですが、中には、いろいろな
内じよう器官があり、たがいに連らくし合
つて、それぞれの働きをしています。

心じよう、血管、りんぱ管などを、じゆ
んかん器といいます。これは、全身に血

液とりんぱ液を通わせ、酸素や養分を配っています。

空気はのどから気管にはいり、気管支を通って、むねの左右に二つずつある はい にはいります。はいは、酸素をとり、炭酸ガスを出します。

この働きをする器官を呼吸器といいます。

消化器には、口、食道、胃腸、かんぞう、すいぞうなどがあつて、食物を消化したり、養分を取ったりしています。

ひによろ器というのは、じんぞう、ひよろ管、ぼつこうなどで、不用な物を体外に出す役目をしています。

神経系には、感覚器官といつて、のう、せきずい神経や、目、耳、鼻、舌、皮膚などがあつて、これは、からだの作用の調和と統一を行なう外に、見たり、聞いたり、かいだり、味わったり、感じたりする器官をします。

(新漢字 単 胃腸舌)

(084. jpg 挿絵あり。横書き)

この外、内分泌器官というのがあつて、これは神経と共にからだの調

和を計っています。

骨とぎん肉の働きについて考えてみましょう。人間のからだには、大小二百個ぐらいの骨があります。のうを保護する頭の骨や、はい、心ぞうなどを保護するろつつ骨があります。からだをキキキキの骨と手足の骨があります。ぎん肉は、のびたりちじんだりする働きを持っています。骨と結びついて、いろいろな運動をするのもあります。

皮ふは、からだを保護したり、体温を調節したりします。皮ふで形の変わったものに、つめと毛があります。

これらの器官が、みなこしようなく働いているのが健康なからだです。頭がいたくなったり、熱が出たりするのは、からだのどこかこしようがあるからです。こんなどきは、すぐ医者にもてもらわなければなりません。また、これらの器官が、こしようを起さぬように、気をつけることが大切です。

2 病気の予防

肉体がたくましく、はげしく

い労働にたえられる人でも

ふと、かぜをひき、それが原因

で、ぽっくり死ぬことがあります。

ます。

そうかと思うと、からだが

(新漢字 護 骨 働)

(85. japan)

弱くても、たびたび大病にかかっても、長生きをする人があります。

いくらじょうぶなからだであっても、若くて死んだのでは、この世に
生まれたかいはありません。わたしたちは、人間として生まれてきたか
らには、何か世の中のために役たつ事をしなければなりません。そのた
めにこそ、健康な肉体が必要なのです。

人間は、科学を発達させ、自然を都合よく作りかえ、住み良い世界を
うち建てることに努力しています。また、精神と肉体とをきたえ、いろ
いろな薬をも発明してきました。

特に、命をおびやかす、苦しみを与える病気に対しては、不断の研究

が進められ、防ぐこと、直すことが、非常に進歩しました。しかし、文明が高度になるにつれ、生活はますます複雑になって、精神や肉体の負担が、いつそう重くなり、病気にかかる人も、決して少なくありません。

病気にかかったときは、すぐ手当てをする必要があります。び熱だからとか、鼻かぜの程度だから、なまごいって、そのままにしておくことんでもない重病になることがあります。どんな軽い病気でも、油断はなりません。しかし、病気にかかってから、手当てをするよりも、かからないように、気をつけることが、もっと大切です。

病気になると、家族にも心配をかけ、仕事もやむおあります。その上、時間と費用がかかります。だから、病気の予防こそ大切であり、健康のもっといいことができます。

病気の予防には、個人として行なう面と、社会として行なう面とがあります。

個人として、できる予防は、まず、衣食住に気をつけることです。い

つも清潔な衣類を身につけるよう
にします。食物は、栄養の多い物
を片寄らないように食べ、食べ過
ぎや飲み過ぎをしないようにしま
す。日当たりの良い家に住んで
空気の流通をよくし、そうじをゆ
き届かせておきます。

次に、平生から心身をきたえ、病気をはね返すだけの体力を養っておくことが必要です。それには、日常の生活を規則正しくしなければなりません。朝ねや夜ふかしを禁じ、いつもさわやかな気分で勉強したり働いたりすることができるよう心がけます。毎朝、冷水まごつをしたり時間を決めて、体操やスポーツをするのも、からだをきたえる方法の一つです。

このようにして、健康に注意していても、絶対に病気にかからないとは言えません。それで、消毒ということが必要になってきます。病気を

がはやるときには、衣類・しん具・食器・家の内外などを消毒すると、予防に効果があります。消毒には、じょう気消毒・日光消毒・薬物消毒の、三つの方法があります。どの方法を用いるにしても、消毒は、てっ底的にしなければなりません。

このようにして、個人として、できる限りの予防に努めていても、チフスとか、コレラなどの伝せん病が流行すると、それにかかることがあります。

たとえば、大雨で河川がはんらんして、町や村が水びたしになったとします。すると、そのきたない水に、病きんがはびこり、大勢の人が、

(新漢字 栄禁 冷底

(087.jpg 挿絵あり)

その病気にかかります。また、

何かの事情で、衣食住に苦し

む人が多くなったとします。

すると、個人では衛生が守り

きれなくなつて、町や村が不

潔になります。病きんがふえ

て、いろいろな伝せん病が流

行します。ですから、病気の予防は、社会としても行なわれなければな

コレラ・ペストせきり・チフス・結核・らい病・トラコーマなどの

予防を個人の力だけでしようとしても、それは不可能です。是非社会が

防がなければならぬので、これらの病気を「社会病」といいます。

社会病を防ぐには、そのための規則をきびしくすると共に、町や村が

水びたしにならないように設備をしたり、また、伝せん病の予防注しや

薬を常に備えておいたりして、衛生のし設を十分にしなければなりま

せん。

からだがじょうぶで、心かはれやかな人には、悪い天気なんてものは

あり得ない。どんな空でも美しいのだから。(イギリスの文学者、ギッ

シング

大事業に、成功する者は、非常なる健康を要する。(アメリカの思想家

エマーソン)

健康に欠けたる者は万事に欠く。

(イギリスのことわざ)

(新漢字 是 備

小説

一 赤毛の男

アフオンソ・シユミット

この小駅は、客といえば、一週間にひとりあるかないかです。
毎日、それこそたいくつききっております。そこへ、あなたのような
方が見えると、つい話したくなってしまいます。

うす暗い石油ランプのあかりのもどで、あなたと向かい合っています
と、サントの話を聞かせたくなりました。そう、たしかにサントの
話です。あなたが、汽車を待つ間、ほんの時間つぶしに……、よかつ
たらお聞きください。



あつちまで、ひつまで届くほど手の長い赤毛の大男が、ふらっと現われ
ました。みすぼらしい、おかしなかつたので、それに、まるでソイツはを

忘れたのかと思うほど、何を聞いても、ものを言わない男でした。

この赤毛の大男が、すたすたと、引きこみ線の方へ行くのを見た次の日わたしは、鉄道士たちから聞いた話に、すっかり心を打たれました。

あの引きこみ線を、一度こらんになってください。

おく地から、大都会とその外、遠くの町に送られる牛は、貨車に乗せられてきます。牛は、せまい貨車の中に、ぎっしり横ならびに詰め込まれ、そのままいく日もいく日も

(新ポル語 Afonso Schmidt Santo)

(089.jpg 挿絵あり)

汽車の旅をします。そしてここが、その牛たちをとまる駅になっています。

牛を積んだ貨車は、夕方この駅にとう着して、次の日の朝出発します

が、その間、牛たちは、引きこみ線で一夜を明かすのです。牛たちはこの駅に来るまでに、もう何日も、貨車の中で過しております。だからひどいつかれと病気のため、死んでいるものもあります。且まがとび出したり、足が折れて血まみれになったりしている牛もいます。それに道中飲まず食わずですから、そのみじめさは、とても口では言えません。赤毛の大男が、引きこみ線のそばを通りかかったとき、ちよつと牛を

積んだ貨車が止まっていました。いたましい牛たちの鳴き声を聞いて赤毛の大男は、その場に立ち止まってしまいました。古ぼけつで、川から水をくんできては、一ぴき二ぴきに飲ませてやりました。かれはこうして夜通し、牛たちの世話をしたのでした。

その日から、この赤毛の大男は、ここに居ついて、牛を積んだ貨車が止まるたびに、弱りきつてうめいている牛のかいほつをし、昼の間に刈っておいた草を配って歩きました。雨がふろつと、風がふろつと、夜通し牛の世話をしました。

さあ、何を食へて、命をつないでいたものでしょう。汽車が駅に止まったとき、機

関士が弁当の残りをやったり、学校に通う子どもが、おかしを投げてやったりしていた

ましたが、……。

とにかく、かれは「こ」にやまる牛たち

の守り神のようなものでした。

(新漢字 Ⅻ)

(990・Japan)

そう、一昨年のことでした。ある日、こに、町の連中が遊びにきました。連中は、引きこみ線のそばにテントを張って、にぎやかに夜を過ごしました。ケントンを飲み、アコーデオンを鳴らして、ダンスをやりました。

その晩、赤毛の大男は、いいおもちゃにやられてしまいました。牛に対する、あのなみはずれたいたわりが、連中の悪さやけの種になったのです。

ひとりの男が、こに言ったのでした。

「おい赤毛、おれの言う通りにしたら、おまえを牛の世話係りにやろう

てやろう。おれは、牛を積んだ貨車の持ち主だぞ。」

赤毛の男は、まるで、おきな子のように、そのことばを信じたのです。それから、かれのやったことは、見ていた近所の者たちを、はらはらさせたといひます。

「おい赤毛、一本足で歩いてみろ。」

かれは、男が「よし」と言うまで、一本足で、その辺を飛び歩きました。

「赤毛、川の中に飛びこめ。」

かれは、いきなり飛びこんで、どろの中までもぐりこみました。

「赤毛、これを一息に飲んでみろ。」

かれは、気を失つたおれるまで、強い酒を口に流しこみました。

次の日、連中が、にぎやかに出発してから、かれは、たき火をしたがら、そばの木の株にこしかけて、約そくの果たされる日がくるのを、じつと待っていました。長い間。――

ある朝、かれは死んでいました。

(新漢字) 株

(新ポル語) quenta

鉄道工夫たちは引きこみ線のそばに、かれをほうむってやりました。今、この近所の者たちは、あの赤毛の男は、サントだったと言っています。なぜかといいますと、ほら、見えるでしょう、やみの向こうの小さな火が。あれは、かれがたいていた、たき火なのです。かれはずいぶん前になくなったのですが、残したたき火は、今も燃え続けているのです。

アフオンソ・シュミット (Afonso Schmidt) は一八九〇年、サントスに近いクバトンで生まれた。かれの両親はドイツ系のブラジル人である。シュミットは、青年時代に、一度もヨーロッパにわたり、人生修業を積んで帰国した。かれはブラジルで、数少ない純著述家の一人で、文学者として、また、ジャーナリストとして活動している。

かれの作品は、多いが、特に「オス・インプネス」「アルモニア」「サント」など世の絶賛を博した。この「赤毛の男」は「サント」を要約したものである。



Afonso Schmidt

二 港の少女

壺井 栄(つぼい さかえ)

瀬戸内海(せとないかい)の数多い島々の中で、小豆島(しょうじ)は、まは、いちばん大きな島です。大

昔から、春になると、この小豆島へは、お大師様のつえのあとを順礼するおへんろさんが、たくさんわたってきて、島中の村々は、その順礼の、すずの音に明けくれました。

村の船着き場のさん橋の近くには、シドリヤという店があります。ケイ子は、そのシドリヤのひとりっ子でした。六十を過ぎたおばあさんとなりで、旅人を相手に、五銭、十銭の商いをしながら、くらしをたてているのです。

(新漢字 修純 銭 商)

(092 . jpg 挿絵あり)

船が村へ着くのは夜のことなので、ケイ子の店は、夕方ごろから忙しくなります。ケイ子が学校から帰ると、おばあ

んは、決まったように いなりずし を作
っていました。これは、お客様に売るた
めで、その外には、手打ちのうどんもあ
りました。春の順礼の季節や、秋のもみ
じのころには、小豆島にわたってくる旅
の人たちは、急にたくさんになり、ミド
リヤは、てんてこまいをするほど忙しく
なります。おばあさんもケイ子も、ちや
ぶ台の前にすわって、夕飯を食べる時間
がなくて、お客様と同じように、店の土間のいすにこしかけて、いな
りずしを食べたり、おうどんを済ませたりすることが、なんどもありま
した。

港の村には、ミドリヤの外にも、食へ物屋はたくさんありますが、女
や子どもでも遠りよなく食事のできる店は、外にありませんので、質素に
旅をする人たちや、おへんろさんたちにとって、ミドリヤは、本当にも
りがたい、親しい店でした。

あのふき、それはもう二年ほど前のことなのですが、ケイ子がおぼ
あつたにせきたてられて、ねまきに着かえていらすと、表の戸があいて
だれかはいってきました。くすん、くすんと、しゃくりあげているやう
もの声に、思わず聞き耳をたてると、それをためかす男の声も聞

(993. 一―四〇)

えます。

「あつ、あつとばかりも食うとな、もう泣くんじゃない。」

そして、おぼあつたに回かいて

「おぼあつた、うんこの熱いのを、ひとつやっておくれ。」

「はいはい。どうした春ちゃん。大きな子が泣いたりして、おかしい

じゃないか。」

そう言う、おぼあつたの声で、それが、ケイ子より一組下の春江（はる
え）である

「何が、すぐにわかりました。ケイ子は、まだ、ねまきをもとに着かえ
て、店へ出ていきました。春江は、おぼあつたをうらんで、あがりかま
ちいもたれて、しゃくり、しゃくりあげているのです。春江の、そのおか

あさんが、高松（たかまつ）にいらるといふ話は、ケイ子もだれからか聞いて知っています。

したが、どういふ訳か、春江もケイ子と同じように小さいときからおかあさん知らず、ずっとおじいさん、おばあさんといふしよばい、くらし

ていたのです。ところが、ついせんだつて、そのおばあさんに死なれ、おじいさんだけになつたので、高松のおかあさんの所へ行くことになり、きのう、学校でお別れもしたのです。春江は、そまつな洋服を着て、古いげたをはいていました。荷物といえば、小さな竹籠りが一つだけです。ケイ子は近寄つていって、

「春江さん、高松へ行くん。」

と、わかりきつたことを、もう一度聞いてみました。春江は、ただうつむいて、しゃべりあげていゝるばかりです。

調理場で、したくをしているおばあさんが、大きな声で言いました。

「今、泣き止つても、あしたの朝、おかあさんの顔を見たらわらうじや

やがてうどんができ おばあさんは それを持って春江たちのそばにやってきました。春江は なかなかおはしを取ろうともしませんでした。「まあ、春ちゃん。さめんうちに食べなされ。天ぷらを入れたから、うまいぞうよ、このうどんは。」

おばあさんに、そう言われて、春江は、やっと気をとり直したように、洋服のそででなみだをぬぐいました。しかし、今度は、少しままりが悪くなったらしく、やはり、はしを取ろうとはしません。おじさんが、気をもんで、早く食べろ、食べろと勧めます。それが、かえって春江をはずかしがらせているようでした。

「そうじゃ、ケイ子もいっしょに食べるか。」

と言って、おばあさんが、大急ぎで、うどんを二つあたためてくれたので、春江は、やっとはしに手を出しました。ふたりは、小さな角ぼんをはさんで、だまつてうどんを食べました。おじさんとおばあさんは、何か話しながら、ふたりの食べるのを、じつと見ていました。食べ終わると、ケイ子は、おばあさんに言われて、自分の小ばいの中から、もも色のリボンを二つ取り出して、おせん別に、春江に差し出しました。

「そりゃ、しやわせになつてるじやろ。」

と答えました。

それから後 ああいう悲しいような旅たちを、見たことはありませんでしたが、ことしになつてから、男の子のひとり旅を、ケイ子は、見送りました。それは、八つぐらいの子どもでした。

おばあさんが、どこかへちよつと出かけたらずで、ケイ子は、ひとり店番をしていたのです。まだ、よいのくらで、外にお客も来ない時間です。その男の子は、つかつかと店へはいつてきて、いきなりたなのガラスびんを指さして

「キヤラメル、おくれ。」

と言いました。

「あれ、キヤラメルじゃないのに。すこんだじやのに。それでもええか。」
ケイ子が、そう言うのを、男の子は、

「それでもええ。」

と、首にかけた財布から、五錢玉を取り出して、ケイ子の手にわたしました。

「これ、十錢よ。」

ケイ子に、その言われたとおり、その子は、だまって財布の中をのぞきこんでいます。いろいろもものぞいているのを見ると、ケイ子は、何か、か
しやませ→こもませ。なつとをこやそ→なつていそでしよ。ええか→いいか

(996. 11204)

わいそつになり、

「どうしたん。もう五銭ないん。」

と聞いてみました。少年は、かざり
をさう、

「あんびど、使つな、すつた。」

ひさびさへなつな声び言ひのでこた。

そつと、おはあつとこ帰つてきつ

「おまご、どいの子かこ。」

とたすねました。少年は、少しも悪

びれたりしないので

「おまご、どいの子かこ。」

と答えました。下村というのはケ

イ子の村から五キロもはなれていくのべ、べの子かわからないはずで
した。

「ひらび、ヒルまど来たんか。」

「うん。」

「遊びに来たんか。」

「ううん、船に乗るん。」

これには、おばあさんもケイ子も、すっかりおどろいてしまっていて、この
小さな子どもを、何者だろうと考えました。もしかしたら、子どもの自
分勝手な考えから、家の者にだまってお船に乗りこむつもりなのかもし
れ

で、ないと思ったからです。けれども、話しているうちに、だんだん、そう

はないことがわかってきました。少年は、どうやら、みなし子らしいの
です。年を聞くと、十二だと言っていますが、からだも小太い、まぶた

（したん→したのか。ないん→ないのか。ううん→ううん→うん）

七つか八つぐらいにしか見えません。どうして、ひとりでいるのか、だれの世話で、この港まで来たのか、それが、はっきりわかりませんでした。話のようから察すると、下村からは、だれかに連れられて歩いてきたようです。荷物は、小さなふろしき包み一つで、自分から、広げて見せた財布の中には、大阪(おおさか)行きの二等切符がはいっており、十錢玉を

紙(よ)りでゆわえた二円(に)ほどのお金の外、二、三十錢(に、さんじ)のばら銭(ばらせん)がはいっていました。

「そして、おまえ、ひとりで大阪まで行くんか。」

と、おばあさんがただと、少年は、きつくかぶりをふり、

「大阪から汽車に乗って、イガのウエノへ行くん。」

と答(こた)えました。

「イガのウエノ、そこまでひとりで行くんか。行ったことあるんか。」

おばあさんは、いっそうびっくりしてしまいました。イガのウエノ、イガのウエノ。ケイ子は、くり返してつづき、ようやく自分の頭の中からは、三重県(みえけん)の上野(うの)の(きま)がし出す(し)た(き)ま(し)た。

「ひらいて行けるかしら。おまわりのこと知らずか。」

「そうじゃのう。いんちうちやい子のひとり旅じゃ。ちつとばかり、
気になるのう。」

心配そうに、おばあさんとケイ子が相談しているのを聞くと、男の子
はさも、大じょうどどと顔つきをこつ

「わからなんだら、これを見せたら行けるんじや。」

そう言いながら、ふろしき包みの中から、横長な形のボール紙を取り出
して見せました。

それは、ひもがついていて、財布と同じように、首ぐらひのちんぽ
う

（行くんかー行くのか。ちつとちつと小さい。ちつとばかり小さいばかり。
わからなんだーわからなかった。）

(098 . j . pap . 09)

になっているのです。少年は、それを首にかけて見せ

「船に乗るよきも、汽車に乗るよきも、これを首にかけとつたら、何も

言わないでも、イガのウエノに行けると言った。」

そのボール紙には、だれにでも読めるかたかなの多い字で

「ミチサマニ、オネガイ申シマス。コノコドモハ、イガノクニノ上野マ
デユキマス。キシヤ、キセンニノリマストキハ、ヨロシクオネガイ申
シマス。」

と、女らしい字で書いてあり、うらには

「三重県 上野町、森十造様。」

としてありました。

「ほんに、男の子ならこそ、こんなちっちゃいのに、ひとり旅もさせる
んかいな。」

おばさんは、何かをくやむような声で言いました。船がくるまでには
まだ二時間のうえもあったので、その間に、うどんをあたたためて食べさ
せたり、ふろしきの中へ、夏みかんを二つばかり入れてやったり、あす
のお弁当にせよといつて、いなりずしを、竹の皮に包んでやったり、ま
るで、わが家の子どもへのように気を配りました。その間にも、少年は
少しもじつとしてはいずに、外へ出ていってはもつてき、また、さん
橋の方へかけ出しては、沖をながめてもつてき、まるで、修学旅行に
行く子どもものように、どび回っていました。そうして、かけ回りながら

もよほどだれかに、強く言い聞かされたとみえて、シドリヤの店を出て行くたびに、止れずに包みを「わきにかかえて、片ときも放しませんでした。

「おまえ、なんという名まえかい。」

(新漢字 家)

(かけとつたら―かけていたら。ほんに―ほんというに。おせるとかいな―おせるとのかな)

(099. j. 104)

おはあつんがきくと、少年は少しでものちがひ

「も、森 ミチオ。」

と答えました。

「千造というおかたは、おまえのおやうせんかいの。」

「知らん。」

「おかあさんは。」

「死んだ。」

少年の顔はぢよつとの間、くもりました。

「じい、あい、下村でか。」

十一時近くになったころ、一番の汽てきが聞こえました。一番が鳴ればさん橋へ出るのですが、少年はもう、あわててどうしき包みを解き、ボール紙を取り出して、首にかけました。そして、ケイ子たちが、見送ってあげると言うのも聞かずに、さん橋の方へかけ出しました。まだまだ汽船は沖の方で、さん橋には二、三人の客よりいませんでした。おばあさんは、待合所へ行って、大阪行きの人をさがして、少年のことをたのみ、さん橋へ来ても、また、そこにいる人たちにたのみました。それは、まるで、自分の孫がひとり旅に出るかのようです。

その間も、ミチオ少年は、むねにボール紙をどうしき包みのまま、さん橋の上を行ったり来たりしていました。やがて、船がさん橋に横つけになると、少年は、一番にタラップをかけ上がり、珍しそうにさん橋の上を見おろしました。

「ミチオさん。」

ケイ子が、呼びかけると、だまってわらってみせましたが、そのあとには船べりにもたれたまま、じっとおかの方を見つめていました。それは母

を失ったこの土地のことを、心の中にたたみこんでおくつもりだったのうなまなざしでした。

「リンチオさん、気をつけてゆきなさいねや。」とおばあさんが呼びかけ、ケイ子がちようちんをきこしあげて、「おやうひなひ。」と軽くおしきりをすると、少年はうれしそうに首だけぴよこんとうなすきました。

もう一度、声には出さないあいさつを送って、ケイ子はさん橋をはなれました。やさしいおばあさんや、ケイ子のことを、少年はぎつと大きくなった後までそのなくなったおかあさんの姿をよもい思い出すことでしょう。

（新漢字 解）

ある日、このものやうに、えんごの音楽を聞いていると、風とは別の調へが混じっているのに気がついた。小さい、かわいい声で鳴くのは卵からかえったばかりのひなぎもがいないこのひなぎも。

「ひなぎも。ユルで鳴っているのかしら。」

いんぎよは、暗いかまゆの中をまきべりまきべりして、それから外に出て

(不足分あり)

(103. j p a g 挿絵あり)

いんぎよと金二は、どっちかとしてもかまわなごうきぎ、むきごなごうきぎ、いはつた。

「そんなら、のぼって数えてみよう。」

「め、めっそうもない。あんな高い所へ、どうしてのぼれるものか。」

「でも、鉄のはしりがついているよ。」

「あれは、子どもがのぼるものではない。あんな、あんな。」

「落ちたらけがをするだらうね。」

「するとも、するとも。けがだけならいいが、死んでしまうよ。金二は

かしい子だから、決してえんとつに近寄ってはいけないよ。ひなの

数は、おしいさんが、だれかにたのんで数えてもらうからね。」

いんきよは やつと金二をなだめたが、それだけでは安心できなかったとみえて、えんとつのぐるりに、竹のかきを結んだ。これなら近寄れないだろうと、ようやく安心したが、ある夜明け前、この竹がきを飛びこして、無法にもえんとつにのぼった者がある。それはどろぼうだった。どろぼうも、初めはのぼるつもりではなかったが、分銅屋にしのびこ

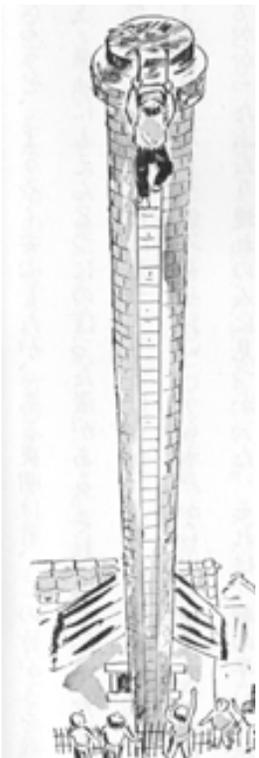
んで、大きなどろしき包みをせおい、うら木戸から出ていこうとしたとき通りかかったふたり連れの人に見つかった。それは、朝の早い、鉄道の勤め人だった。いくら平和な町でも、鼻の先に、ほおかむりをして、どろしき包みをせおった人間が、よそのうら口からのび出ようとしているのを見たら、どろぼうだと気がつく。鉄道の勤め人たちは、ぎよつ
ふつ

「アムシぼう。どろぼう。」

「みんな来てくれたぞい。どろぼうですぞい。」

とけたたましくきけんだ。どろぼうはびっくりして、庭へひき返した

が出会いがしらに、朝の早いいきまが函戸をあけているのにおつか
った。ろじのさわぎは大きくなった。早くも近所の人起きたのだ
らう。にげ道を失ったどろぼうは、あと先の考えもなく、竹がきを飛び
こして、えんとつによじのぼった。集まってきた町の人が、えんとつを
とり囲んで、見ると大きなどろしき包みは、竹がきにひっかかり、えん
とつのでっぺんには、おりからのありあけの月をいただいて、どろぼう
がうずくまっていた。



「えんちゅう。」

町の人々は、あらためてののしった。どろぼうは答えなかったが、その
かわり、分銅屋のおばあさんがどろしき包みを取り返して、うちへしよ
らいもつとしてくるのを、よそ見をしながら指さした。人々はどつとわ
らった。

「あれは、えんちゅうのぼんぼりだよ。」

「りくつは、そうかもしれない。まだ、ぬすんでいった訳ではないからね。」

「しかし、まぬけなまじろぼうがいたものだ。あんな所へのぼって、どうしてまじろぼうもりなまじろぼう。」

「だが、こいちもいまますよ。まじろぼうつかまえたらいいでまじろぼうね。」
始末にまつて相談している人の中から、消防団の団長を勤めているた

(105. j p a g 挿絵あり)

たみ屋の親方が、一足前に出て
談判を始めました。

「おなましへおりていじ。」

まじろぼうはいやいやをした。

「まじろぼうなごかひり おつて

いじ。」

「そのまはへむえ。」

まじろぼうはまじろぼうのまじろぼう
いた。

「みんな あっちへ行ったら」

おりてやる。くやしかったら、こゝまでおこせ。」

どろぼうは、片手をはずして、おいでおいでをしかけた。分銅屋のいきよはおどろいて、「あぶない。」と思わず大きな声で注意した。

「下を見なよ。目まいを起したらどうする。」

この注意は、かえって悪い結果を招いてしまった。どろぼうは、はじめてえんとつの高さで気がついたらしく、あわてて鉄のはしごにしがみついた。たぶん、バットをさかさに立てたてっぺんに取りついているようなおそろしさを、全身で感じたのだろう。その時分には、すっかり明るくなっていたから、どろぼうのからだがわななくのが、下から見てもわかった。

「それだから、竹のかきをゆわえておいたのに。」

いきよは、とほうにくれたが、たたみ屋の親方は、本気になって

「よし、消防ポンプを引っぱってきて、水をぶっかけてやる。」

と、手につばをかけて言った。「これは名案だと、若者たちが、ポンプを

ひっぽり出っけに行っけしたとき えんとこのてっぺんが あやこい
けび声が起こった。おどろいて見上げると、いつの間にか飛んできたもの
か、一羽のこいさぎが、どろぼう目かけて、おどろかかっている。ひな
を

ぬすまれると思ったのだらう。とんがりぼうしのような頭の毛をきか立
てて、長い足でけり、すどどくちぼしどくちきかかるのである。どろ
ぼうは、片手を放して、頭の上を防
いでいたが、ついにたまりかねて悲
鳴をあげた。

「助けてくれーっ。」

町の人は、おもしろがって、人間と
鳥との争いを見物していたが、分銅
屋のいんぎよは、真げんに



「どろぼうな、みなさん。いんぎよをかけたが、ひきこいてんだらうか。
か。」

と、相談をもちかけた。

「それは、いんぎよさん、いけません。みんながいなくなるどろ

「ほいがかげしてしまふまふよ。」

「アムンが、あれはほんぼろではない。実はその、えんごのつていんごいんぎきがひなをかえたのだが、何羽いるかわからないから、あの人にたのんで、様子を見に行ってもらったのです。」

「アムンほいにも聞かせるよいと言った。」

「アムンだんごやなご。アムンごきよもこの話よ、おんぎ話よ。」

と、ただみ屋の親方は、相手にしなかった。

「おんぎ話よまがまわん。そういひアムンご、かんべんごやうていへん

(107. 112a)

だごい。わしがたのも、落ちたら命があつないし、石川五右いしかわ

ムンゴ上門 (もご) のよ

うな、大どろぼろでもなまそろうだから。」

「アムンごきよもアムンが、そのつもりなら、わたしはかまいませんがね。」

町の人は、ようやくなつとくしたが、それでも思いきりが悪く

昔から、あんな人だったよ。いんぎよは。」

と、かげ口をききながら帰っていった。そのあとで、いんぎよは、どろ

ぼうを見上げて

「みんな帰ったから、安心しておりておいで。しかし、ひなの頭数を数えるのを忘れてはいけませんよ。」

と言いつつ、ひきこった。

えん側にこしかけて待っているよ、どろぼうは無事におちてきて、きまり悪そうにはおかむりを取った。どろぼうをやるとしては、善賢ぞうで、どろぼうか、まのぬけた顔つきをしている。

「おれおれ、これで安心した。ときに、ひなは、何羽いたな。」

どろぼうは、あいさつのしようがなかったとみえて、よ、これた左の手のひらに右手の人さし指を二本とえて、ひなの頭数を示した。

「そうだろう。金二、起きなさい。ひなの数がわかったよ。」

いんきよは、後ろにねじ向いて、何も知らずに朝ねをしている金二を起こした。その間に、どろぼうは、うら木戸から出ていったが、なんと思つたか、あつちむらこつた。

「うら木戸から出て。」

「うら木戸から出て。」

「あんまりっぱなえんとつを遊ばしておくってことがあるか。てっぺんは鳥のふんだらけだ。けむりを出すくまづをしたらどうだね。」

(108. jpeg 挿絵あり)

「おしも、そう思うてくごん。」

いんぎよは、ちよびぎとくへ起きてきた金二の頭をなでながら、いばつて答えた。

「まあ、見ているがいい。この子が大きくなったら、いんぎよはすはかけさせないつもりだ。」

「おじいさん。あのおじいさんはだれ。」

金二は、せめきつない目をこすりながらたずねた。

「ひなの数を数えてくれた人だ。やっぱり、おじいさんの方が当たって

いたぞ。ひなは、六羽だったよ。」

いんぎよは、得意そうに答えた。

課外 ハンス・クリスチャン・アンデルセン

一千八百五五年四月 デンマークの

フイーン島 オーデンセという町の

貧しいくつ屋に、男の子が生まれま

した。父は、文学のすきな人で、母

は、愛情の深い、心のやさしい人で

した。この男の子、それが後の童話

竹家ハンス・クリスチャン・アンデルセンです。

ハンスは、外の子どもたちのように、外をかけ回って遊ぶことをこのみませんでした。庭のすぐりの木を、毎日あきすにながめている風葉お

(109. jpg 挿絵あり)

りな、空想のすきな子どもでした。

秋の取り入れ時になると、よその畑に落ちぼ拾いに行く人たちがいました。ハンスも、ある日、友だちといっしょに落ちぼ拾いに行きました。そこは、評判のいじ悪いさんの畑でした。ハンスたちを見つけたじい

さくは、むらぎを持って追いはりにやうしてきました。みんなは、うまくにげ出しましたが、ハンスはにげおくれて、むちで打たれそうになりました。ハンスは、じいさんの顔を見上げて言いました。

「神様が見てくいてしゃんよ。それでも、ぼんやあいの。」

さくは、むらぎをいまだに、じいさんには急いでさく顔をして、むちをすてその手でハンスの頭をなでました。

「おまえ、名はなんといっんだい。」

「ハンスだよ。」

じいさんは、にににに、五、六まいの銅貨を、ハンスの手にとぎらせたました。ハンスの母はこのことを近所の人に話して

「ハの子は、むらぎをすてます。だれでも、ハの子は、やせへんやうで、ぼんやあいのです。きつと、ハの子は、神様がついてくるので

ごちん。」

と言いました。

ハンスのすきな人に、父母の外に、おばあさんがありました。おばあさんには、町の善病院の庭番やとわれていました。おばあさんは土曜

日ごと、ハンスの家に来て、おもしろい昔話を聞かせてくれました。ハンスもまた、おばあさんの働いている病院に行くことがありました。「ハンスは病院にいる年よりたちに、歌を歌ったり、お話をして聞かせたりしました、年よりたちも、ハンスに、ふしぎな話や、おもしろい話を聞かせてくれました。

(110. jpeg 挿絵あり)

ハンスは、学校にいく年になりました。学校で、ハンスはひとりの女の子と友だちになりました。

「わたしは、今に、りっぱなおやじが、ほいほいおまがのよ。」

「そんな所へいかななくていいよ。」

「いよ、ぼくが、えらいなつて。」

「おしんに住むようになつたら、」

「乳しぼりにやとつてあげようよ。」

「何言ってるの、あんたは。」

ただの貧（ひん）ぼう人の子じやな

くの。」

「今は貧ぼうさ。でも、そのうちりっぱな身分になれるんだ。神様のお使いが、そう言ったんだもの。」

女の子は、しばらくハンスの顔を見ていたが、

「この子は、気が変わったのよ。おじいさんみたいに。」

とみんなに言いました。ハンスのおじいさんは、きちがい病院にはいつていたのです。それ以来、ハンスは、女の子と遊びませんでした。

ハンスの父は、静かないなかで、仕事のあいまに、本を読んだり、詩を作ったりしてくらすことを望んでいました。ちよつど、いなかの大きなおやしきで、くつなおしの職人をほしがっていることを聞き、出かけにいきました。しかし、おやしきでは、やどつてくれませんでした。い

(III. jpg 挿絵あり)

なが行きがだめになってから、いつそつふたぎんていた父は、やがて軍隊にはいりましたが、病気になるって帰り、間もなく死んでしまいました

ハンスの母は、仕方なく、よその家のせんたくをして、細々としたりしをたてました。ハンスは、家で人形しばいをして遊んだり、人形の着物をぬったりしてする番をしました。そのうちに、ハンスは、たいそうしばいが好きになりました。げき場は、ハンスのいちばん好きな所ですが、貧乏なので、めったにしばいを見に行くことができません。ハンスは、びら配りのペーテルとか良しになり、びら配りを手伝ってその代わりにしばいを見せてもらいました。げき場に行けない日には、びらを見て、げきを考へ出し、それを人形しばいでやってみて、ひとりで楽しんでいました。そのうちに、ハンスは、どうかして、役者が歌うたいになりたいと考へるようになりました。

こうして、ハンスが十四才になったとき、ハンスの母は、ハンスを任立屋のぞしにすることを決心しました。

「おまえが、あのスチグマンさんのようなら、りっぱな任立屋さんになつてくれたら、わたしは、どんなにかうれしいよ。」

母は、こう言われると、ハンスは、役者になりたいと言ひ出せませんで

した。

その年の夏、コペンハーゲンの王立げき場の役者が、オーデンセに来てしばいをしました。ハンスは、びら配りのペーテルにたのんで、そのしばいをぶだいうらから見物させてもらおうことにしました。ところ

(112. jpg 挿絵あり)

が、思いもかけない事が起りました。子役が足りなくて、ハンスもぶたいに出ることになりました。ハンスは、大喜びで、熱心に、その役を勤めました。そして、役者になりたいという希望を、ますます強く持つようになりました。

「おかあさん、ぼくをコペンハーゲンに行かせてください。」

「え、コペンハーゲン。名高い仕立屋さんでもいるのかい。」

「ぼく、役者になりたいことです。」

母は、びっけりしました。そして、うらないばあさんに、ハンスの運命をうらなわせ、もて、「この町をばなれてはいけなう。」という、うらなうが、出れば、ハンスを引き止める、うが、びきん、うきま、ました。母は、

うらないをあてにしていっぱいあそびをよんできました。ところが、そのあては、すっかりはずれました。

「あなたのむすこさんは、コペンハーゲンに行つて、えらい人になりますぞ。このオーデンセの町は、花火と楽隊で、あなたのむすこさんをむかえるおきがくるぞいよ。」

うらないばあさんが、こう言ったので、母は、もうハンスを引き止めることはできませんでした。

ハンスが、コペンハーゲンへ行ったのは、一千八百十九年九月でした。あこがれの王立げき場で働きたいと思つて、たずねて行きました。やとつてくれるようにたのみましたが、げき場の支配人に、すげなくことわられました。

と方にくれたハンスは、新聞広告で仕事口をさがし、あるさし物師の弟子になりました。しかし、そこでは、職人にいじめられ、長くいるこ

(113. jpg 挿絵あり)

とげきできませんでした。

さし物師の家から出たとき、ハンス

は、ぐう黙、作曲家のワイゼという人

の世話で、王立音楽学校の校長シンボー

ニ先生の家に引きとられることになり

ました。ハンスは、そこで声楽を習っ

ことになり、大喜びでした。しかし、

この喜びも、九か月後には、絶望に変

わりました。それは、ハンスの声がつぶれてしまったからです。

シンボーニ先生はハンスに言いました。

「ハンス君、残念だろうが、歌手になることは、あきらめたまえ。オー

デンセに帰って、外のことをおやりなさい。」

ハンスは、どんな思いで、この言葉を聞いたことでしょうか。ハンスは

これから先、どうすればよいかと、思いなやんでいました。ところが、

なんと運の良いハンスでしょう。幸いにも、ワイゼ先生と、詩人のグル

ベル先生などが、ハンスのめんどうをみてくれたということになりました。

こうして、ハンスは、おぶよう学校に通うことになりました。声がつぶ

れていても、おぶよう家になるといふ道があったのです。食へ物は朝のコ

ハンスが、後に、『思い出の記』の中に、

「コリンさんほど、わたしの進歩と成功を喜び、わたしの悲しみの、一つ一つを共にしてくれた人はありません。」

と書いている人です。

コリンは、国王フレデリック六世に、ハンスのことを願い出ました。そして、ハンスは、国王から生活費その他いっさいの費用をいただき、またスラゲルセのラテン語学校に入学が許されたのでした。こうしてハンスは、十七才から二十一才まで、ラテン語学校で勉強しました。

一千八百一十七年九月、五年ぶりで、ハンスはスラゲルセからコペンハーゲンに帰り、あくる年、太学に入学しました。久しぶりにおちついたとき、今まで、ハンスの心の中にせき止められていた詩が、いずみのよ

うにあふれ出てきました。しかし、名もない詩人の本を出してくれる出版社はありません。ハンスは自分の金で、詩集を出版しました。それはたいそう評判がよく、意外にも、たちまち売り切れてしまいました。

それを知った出版社は、第版 第二版と続けて出版し、後にはスエーデン語やドイツ語にもほんやくされ、多くの人に読まれました。この詩集によって、詩人ハンス・クリスチャン・アンデルセンは有名になりました。ハンスは、続いて、一つのげききを書きましたが、それが、王立げき場で上演(えん)されることになりました。十年前 たったひとりでコペンハーゲンに来て、まっ先にとんでいった、あの、王立げき場です。

その日、げき場は、大入り満員でした。

「アンデルセン君、ばんざい。ばんざい。」

友人たちは、ハンスをとりまいて、その成功を祝しました。ハンスが、まっ先にかけてしたのは、ヨナス・コリンのやしきでした。コリンとその家族の人々は、ハンスの手を取って、なみだを流して喜びました。

一千八百三十二年、ハンスは国費で、フランス、イタリアに旅行しました。四月、コペンハーゲンをた

って、フランスに行き、詩人ハイ

ネや多数の芸術家たちと会い、楽



詩人ハイネ

しい日々を過ごしたハンスは、九月、イタリアに着きました。イタリア

リアの自然の美しさは、すっかり、

かれの心をとらえてしまいました。ハンスは、このとき、ローマ生まれの少年を主人公とした物語を組み立てはじめました。ハンスは、この物語を旅の終わりがら、ローマで書き始め、デンマークに帰ってから、書き終わりました。こうして、できたのが、有名な「即興詩人」(そっきょうしじん)です。こ

れは、すぐスエーデン語にやくされ、ロシア語にやくされ、やがて、世界中に広まっていきました。

(116. j. 1938)

アンデルセンは、いつか、書いてみたいと思っていた子どもたちのための話を書きました。小さいころ、母、祖母、じ善病院の年よりのたちから聞いた昔話を、思い出して書きました。それをまとめて、「子どもたちのためのお話集」という題で出版しました。この本は、みんなからほめられると思ったのに、だれもほめませんでした。アンデルセンはがっかりして

次に、小説をいくつか書きました。

その年の夏 アンデルセンは、フイーン島のあちろちろを旅行しました。思いがけないことに、あのお話集が、さかんに読まれていました。子どもばかりでなく、おとなたちが熱心に読んでいたのでした。これを見てアンデルセンは、深く考えこみました。

「本当に心を打つものをもっていれば、だれにだって読まれるのだ。わたしは童話を書こう。りっぱな童話を書いて、大勢の人に童話の価値を認めさせよう。」

アンデルセンは、かたく決心しました。そして、今度は、「子どものため」という、ことあり書きはつけずに、「新童話集」という題名で出版しました。はじめて書いたこの長編童話の中の「人魚ひめ」は、たいそう評判になりました。

こうして、アンデルセンは、およそ三十五年間、童話を書き続けました。だれでもよく知っている「赤いくつ」「雪の女王」「マッチ売りの少女」「見にくいあひるの子」「はだかの王様」などは、みんな、アンデルセンのおいたちと、切り放せないお話です。

りっぱな童話を書いたアンデルセンは、世界中に知られるようになり

ました。一千八百六十七年、すうみつこもん官になり、故郷のオーデン
セに招かれ、市会から、各々市民の称号をおくられました。

(117. j. pass)

十四才のとき、あのうらないばあさんが言ったことは、うそではあり
ませんでした。アンデルセン歎けいの日、オーデンセの町は美しくかざ
られ、花火は絶え間なく打ち上げられました。

一千八百七十五年四月、アンデルセンは、世界中の人々から七十才の
たん生日を祝われました。そして、その年の八月、ねむるように、その
生がいを終わりました。

先生と父母へ

先般、第一期の「日本語」八巻の出版に当たったとき、一応初級段階を完了させるように、語い、漢字、内容などを考慮して編集した。ところが、今回、さらに進んで中級のものを出版するに当たり、前八巻では未提出の教育漢字や語

いもあり、内容的にも補充を要するところがあると思われたので、すぐに中級に進むには、多少困難ではないかと考えられた。そこで、初級段階を補い、また中級段階への準備にもなるようにと考え、この「日本語」(九)を編集した。

この本の編集上、特に留意した点をのべてみよう。① 一課一課、独立はして いるが、前後の各課と関連をもつような様式(単元的構成)をとった。② ブラジルという環境にあわせるようにした。生徒が、ブラジル語学校で学習しているもの、なるべく関連させたいと考えた。ブラジルの詩、物語、歴史的、地理的な題材をとり入れた。③ 言語学習「話す、聞く、読む、書く、つづる」をますます発展させ、特に、理知的な文章の読解力をつけるための考慮をした。

④ 読解力を養うために、社会科的、理科的な題材もとりあげた。

実際の指導に当たっては、その地域、その学校、その級、その生徒によって特異性があるので、指導法、時間数その他を一定することはできない。指導者は、現地の状況、生徒の能力に応じた指導を行なってほしい。

6〜11

詩を読もう

【ジャガダ・水】

海上風景をう

たったブラジルの詩と、農村の生活に即した詩とを二つあげてある。① 詩になれ親しむ態度を養う。② 詩の美しさ（ジャンガダ）と詩の力強さ（水）とを味わわせる。③ 生活の中に材料を見出し、詩作への興味をおこさせる。④ 作品を鑑賞し、批評する力を養う。

12〜22

ノルデステの旅

【ジュアゼイロからサルゲ

イロまで】【カリリ地方】【サン・ゴンサロ・ダム】【フォル

タレザまで】【ノルデステの海】の五章に分けたブラジル北東他

方の紀行文である。

① 紀行文を読み味わう態度や技能を養う。② 未知の土地に対する作者の見方や感じ方を理解させ、作品を読み味わわせる。③ 文脈の中で語句のもつ意味や語感を つかませ、写実的な随筆になれさせる。④ 文章と地図とを対照させて地理的理解を深めさせる。⑤ 北東地方の風俗習慣を理解させ、旅行に興味をもたせ、紀行文

(124. jpg 右 pg から。 【アンダーラインあり】)

を書く意欲をおこさせる。

23〜31

ことばを調べる

【話す場合と書く場合】

① 話す場

合と書く場合のことばの使い 方のちがいを理解させる。② 二つの場合の使いわけを知り、明確に表現する能力を 養う。 【送りがなのつけ方】

① 送りがなのつけ方のきまりを覚えさせ、目的に応じた読み方や表現の技能を養う。② ようすを表わすことばの場合（空が青い、美しい

花、明るい教室、夜は静かだ）③ 動作を表わすことばの

場合（みんなで遊ぶ、映画会が終わる）④ その他の場合（後ろを向く、木を植える）（物語、夕立、小包）

32〜44

土に生きる

【新しい土地】

（開拓地に入植するまでの

経過【ひらけていく村】(入植 地と生活の現状) アンケート (将来への抱負) とからなっている。① 毎日の生活をよく見詰め、よく考え、文章に書くことによつて毎月の生き方、考え方をいっそう深める態度、技能を養う。② 生活を表現した文を読んで、味わったり、考えたり、文章をねつたりする技能を養う。③ 言語表現の技能を必要とすることはもちろんだが、さらに内容のある自覚のこもったものでなければならぬ。この段階では、単なる身辺雑記にとどまるようなものであつてはならないので、その指導の第一歩として、自覚した表現文を読ませる。④ 生活を題材として文を書かせる。

45〜59 紙とわたしたちの生活 ① 紙は現代の社会生活に欠くことのできないものである。紙はいつごろできたのか、紙の原料は何であるかを理解させる。② 紙工場、新聞社などの見学記録を読ませる。③ また、印刷に関係ある活字について理解させる。④ 新聞の紙面構成やその利用の仕方を理解させる。【紙は文化のバロメーター】

ここでは紙の重要性と紙の原料を理解させる。【製紙工場を見る】 見学記録文の読解力を養う。難語句を理解しながら、各節を確実に読解する力を養う。【新聞ができるまで】

新聞が刷りあがるまでの経過をわからせ、小みだしや、写真を参照しながら文章を読む技能を養う。【活字】 活字及び活字の実体について理解させる。【新聞の利用】 新聞の

各面の構成を理解させ、新聞を読む習慣をつけ、生活を高め、充実していく態度を養う。また目的に応じた新聞の読み方を理解させる。

60〜68 エチケツト ① 社会生活に必要な礼儀作法を理解させる。② それを実行する 態度を養う。はじめになぜエチケツトが必要かを理解させ、その精神を教え、具体的な実際の場についての礼儀作法を理解させる。〔注〕この課は読むだけでなく実践に うつさせるようにしたい。

69〜71 川柳 ① 川柳をくり返し読ませ、ユーモアを味わう態度を養う。② 川柳という文学形式を理解させ親しま

せる。③ 川柳における事物のとらえ方の特徴について考えさせ、川柳と俳句との違いを理解させる。④ 川柳を文章に書きなおさせる。

72～84

よい文章を書くには

【気軽にペンを取ろう】

① この課は、書くことをとかくおつくりがる生徒に進んで文章を書く意欲を起させたいためにとりあげたのである。

② 生活文、日記、手紙、記録などを書く場合に必要な注意を一応理解させる。

【ふ号の用い方】 ① 文を書く場合にぜひ必要で、注意しなければならぬ各種のふ号を理解させ、正しく、使用する能力を養う。(。、・) (ー) ……などを例をあげて説明した) ② 文を読む場合にもふ号に注意して、正しく読みとる態度を養う。85～99 短い作品 ① 読むことの楽しさを知り、読書に親しむ態度を養う。② 情景や人間の心情が、書かれている箇所を読み味わう。③ 大きな段階にきって、文章の構成

をつかませる。④ 【リンドルフオ・ゴメスの天

国】は、ユーモアのあるおもしろいもので、生徒の興味や関心をひきつける力をもっている。また、【小川未明の金魚売り】は、金魚に対する愛情の細やかさのある文である。二つの作品を読みくらべて、文学作品を鑑賞する技能や態度を養う。

100～111 水と空気 水と空気を中心として、固体、液体、気体の基本的な物理的性質について理解させる。【水げん地で】 ① カンタレイラ水げん地に行った時の生徒の作文形式の文である。② 生徒と先生の間答により、いろいろの知識を深めていく。(池の水の青い理由、水平面、ふん水、水蒸気、地球の引力、水の成分など。)

【空気の成分】 大気、気圧、空気の性質、空気の成分などの知識を深めさせる。

112～117

詩二題

① 風船(マノエル・バンデイラ)と

、たき火（北原白秋）を読ませて、

詩を鑑賞する力を養う。② くり返しくり返し読んで、味わう態度を養う。③ 作者はなにに感動しているかを読みとらせる。④ 詩に現われている感情をとらえさせる。⑤ 表現がどのようなふうしてあるかをしらべさせる。⑥ 全体の調子、リズムが内容とよく調和しているところを考えさせる。⑦ 詩の内容を読みとり、それにふさわしい朗読ができるようにする。⑧ 詩の鑑賞文がかけるようにする。

118～126 イザベル王女 イザベル王女のひととなりを知り、王女がどれい解放に心身をささげて努力し、神にいのりをささげて祖国ブラジルを愛した崇高な精神を読みとらせた
い。

127～137 「自分」について考える 【1. 人の値うち】 【2

反省】 【3. 自分をたいせつに】 などからなっている。【人の値うち】 ① 社会における個人のあり方や、生き方、真の

価値を説いている論説文である。② 段落ごとに要点をつかませ、段落相互の関係を はつきりさせ、論旨の進め方をわからせる。（論説文の読解力を養う。） 反省 ①

記念文集の編集委員になった京子が級友の作文を読みながら自分の一年間を反省している生活文である。④

反省することがたいせつであることを理解させ、よい習慣をつけさせる。自分をたいせつに ① 生命の尊重と保健衛生に関するよい習慣を養う。② 自他の人格を尊重する態度を養う。③ 他人に対する思いやりの心情を、他

人と協力する態度を養う。④ 自己を向上させ、他人を幸福にし、よい社会を作る態度を養う。

(123. jpg 右 pg のみ。横書き。【アンダーラインあり。左 pg 新漢字一覧表】)

138～146 フットボール試合 ① フットボールのおもしろさを読みとらせ、心情を豊かにする。

② 試合用語を教える。③ このような文を作る意欲をおこさせる。「注」試合を

参観する場合の態度なども教えたい。

147～160 ウィリアム・テル 放送劇脚本。① 放送劇の脚本形式になれさせる。② 放送劇

の特色を理解し、劇のテーマを読みとらせる。

③ 祖国に対する愛情、自由を守る強

い決意などをこの文から読みとらせる。④ 朗読の練習をさせる。⑤ 放送劇として

実演させる。

161～171 からだをしようぶに 【人間のからだ】① 人のからだのはたらきに関心をもたせ、

健康をまもろうとする気もちを持たせる。②

人体の消化、循環、呼吸、排出の器官

のつくりとはたらきの大要を理解させる。③

人体の骨格や筋肉のだいたいを知ら

せ、からだを動かす仕組みを理解させる。【病

気の予防】① 病気に対する予防の方法

を理解させる。② 進んで病気の予防につと

める態度を養う。

172～197 小説 ① 文学作品に親しみ、また楽しんで読もうとする態度を養う。② 文章

を読み通す態度を養う。③ 文学作品の主題

を読みとる技能を養う。④ 情景や人間

の心情が書かれている箇所を中心に、作品を

鑑賞、読む技能を高める。⑤ 文学作
品を読むことに興味を深め、人生を深く考える態度を身
につけさせる。

課 外

98〜230 この課外読み物は、読書欲の出た生徒たちに、読ませ
るためと、読書力をつけるた

め、補充題材として採用したものである。物語を読み
とおさせ、思考力や読解力の
向上をはからせる。

【分銅屋のえんとつ】① すじの変化や登場人物の性
格、表現のたくみな点などを味

読させる。② 感想を話し合わせる。

【ハンス・クリスチャン・アンデルセン ① 童話作
家・アンデルセンの一生を物語

ぶりに書いたものである。② 難解な漢字や語句はほと
んどないので、語句にこだわ

らず読みとおさせる。③ アンデルセンのおいたちを読
みとらせる。④ 生徒が自分

からアンデルセンの童話に興味をもつように仕向け、い
くつかの童話を読ませる。

(122. jpad 121. jpad途中まで 漢字、こぼば一覽表

(121. jpad 途中まで)

今までに習った漢字 (提出順)

(1) 一二三四五六七八九十日小木下川大上月子手足
中牛人

(2) 石方出水赤青土口夕走目耳左右女光外見声力本
火白立金犬入山

(3) 行田先生年学校音合雨天氣車步半分平回前字空
広花汽長夏冬高糸休

貝早虫少知林元風作台夜組村会馬品町黒色千何百
国名書形竹每思引古

玉毛切友男地神今太秋南野北森自正

(4) 来久話言当凶画用紙度返事家草葉安心向朝持西
多去聞時近東京場海

所文讀次記間黄池王島根同血止道考屋絵店米売買
取明戸仕原樂門全工

美使春刀雲

(5) 教室新始番徒数相談角順君宮顔重物動具板植注
意員曜午後終受昼集

者歌助星寒々乗波遠族進任命畑以守通勉強部祭運
役急式客谷晴才世弱

死社両追礼着食皮病配語号指材料点母界父魚都州
公園市体育研究民苦

感雪烏表旅

(6) 庭飛遊拾付落鳴戦負初勝味旗念祝線円連定曲機
球面茶陸湖線鐵路交

統央岸比温万船隊航発喜変起開送移残帰独最代共
和第問卒業頭愛打

弟妹活軍実恩流首種關係置細農焼由肉柱建銅深他

布医清短坂投習別岩

調筆府馭区局社商寺有浴博館類港暑樣身似利毒折
便底綿轉写理科化成

益害答惡菜果親橋器特待服席電燈消暗速兄說決荷
等衣主芽

(7) 詩歡幸福養求息結常周圍無型選示製非的案内積
設築銀過官舍階院政

治造統領計題未展願希望位置列洋季節然總億達景
県富湯歴史脈余散在

複郡紀皇蚕織伝漢仏芸法規則必要武勢争氏側士倍
努識得信真低差述限

直情失週予奇河照張精敗勞系耕産增收級技師術不
辞報告往復善迷敬悲

退応接熱薬菌印刷各救防完功績申適対飯冷罪老静
祭兵令団練覚試承鼻

陽典競末唱際参輪章確序録極塩械満秒整妻雜律算
解放良横

(8) 句停里包姉宿張貸験境鉞油麦栄帯勇墓英盟飲厚貧
慣情容易準備象省

略仁保管版件期的協委導反司輕鏡昭眼孫想像元固水
粉現修夫泳詞性質

副酒犬觀街永攻因招欲登費貨堂咋臣

まだ習わない教育漢字（五十音順）

遺老演賀我革疑供均訓郡券憲講謝就諸推聖
誠藏測著党式納犯婦貿務臨

(120. jpg、119. jpg、118. jpg途中まで 言葉
一覽表)

(118. jpg 途中から)

当用漢字別表（教育漢字表）（音読の順にな
らべ、音読のできない字は訓読でならべてある。）

日本で、義務教育が終わるまでに使いこなさなけれ
ばならない881字

あ く お

愛悪庄安暗案 意衣以罍位医委胃

移異遺育一壺引印員院飲因 雨雲

運 泳英栄永衛営易駅液益円園遠

塩演延 王横央往応屋億音温恩

か く し

下火花何夏家化科荷歌加貨仮果河

過価課可画芽賀我会海回貝界開絵

改械階快解外害角覺各格確革拈学
額活株間寒感官関館觀完漢慣管刊
勸幹歛岸岩顏願眼 水汽起帰記期
季喜旗器機希寄紀規基貴技義議疑
客逆九休究急級球宮久求救給旧牛
去拳居許魚漁京強教橋共協鏡競供
境業局曲極玉金近動均禁銀 苦区
句具空君訓郡軍群 兄計形係景輕
型経敬系芸決血結欠潔月大見研鼎
建件健験券兼険検絹権憲元原言限
現減敵 戸古庫固湖個己故五午後
語誤護口工光考行校高公広交向黄
幸航港功厚候康鋌興講后孝効皇耕
構合号谷国黒告穀今根混

さ 　　ゝ 　　そ

左差查才細祭菜最際再災採妻濟材
在財罪作咋策刷察殺雜三山算産散

參蚕酸贅殘 子四糸思紙仕止市死

使始指士史司姉齒試詩支氏示志師

至私視詞資耳字時寺次自事持似辭

兒式識七宝失質日実車社者写舍謝

借穉弱手主取首守酒種受授需秋終

週集州拾習収周修就宗衆十住重從

祝宿出述術春順準純処書所暑初諸

女助序除小少昭勝消唱商章燒照省

象賞承招称証上乘場情常条状色食

權織職森心申身神深進新親臣信真

人仁 凶水推数 世是正生青西声

星晴成清勢靜整性政精製制聖誠稅

夕石赤席責積績切雪節折接設說舌

絶川先千船線戰選淺錢宣專前全然

善 組祖素早走草送争相倉想総創

造像增藏足息速則側測俗族統属卒

村孫存尊損

た　　く　　と

多他打太体待対隊帶貸退態大台第

代題達炭短单男談団断　地池知治

置竹築茶着中虫注柱昼忠貯著町長

鳥朝帳調張腸直賃　追通　弟丁定

底庭停低提程的適敵鉄田天店典点

転展電伝　土都徒度努冬東刀当投

島答頭湯登等燈統計党道動同党童

働銅導特得徳読毒独届

な　　く　　の

内南難　二式肉大任認　熱年念燃

農能納

は　　く　　ぼ

波破派馬配敗拝買売倍白博麦畑八

発半坂反板飯犯判版番　皮飛悲費

比肥非否美鼻備必筆百表氷俵票標

評病秒品貧 父負不夫付布府婦富

部武風服福副復複物仏粉奮分文聞

平兵陸米別返変辺編勉便弁 歩

保補母墓方包放法報豊望防貿暴北

木牧本

ま ㄣ も

毎妹末万満 味末脈民 務無 名

明鳴命迷盟面綿 毛目門問

や ㄣ よ

夜野役薬約訳 油輸右友由有勇遊

予余預用葉様曜洋陽要容養浴欲

ら ㄣ ろ

来落楽 里理利力陸立律率略流留

旅両良料量領緑林輪臨 類 札冷

令例歴列連練 路老勞六録論

わ

話 和

元文部省図書監修官

監修 林 実 元

(在東京)

編集執筆(ABC順)

古野 菊生

二木 秀人

加藤 千重子

岡崎 親

坂田 忠夫

武本 由夫

表紙・押絵(ABC順)

高岡 由也

星ルリ子

日 本 語 (9)

一九六七年九月二十五日 印刷
一九六七年九月三十日 発行

定価

著作者 日 伯 文 化 普 及 会
日本語教科書刊行委員会

発行者 日 伯 文 化 普 及 会
ブラジル、サン・パウロ市
サンジヨアキン街二八一

東京都千代田区神田神保町三ノ二九

印刷者 株式会社 帝 国 書 院
代表者 守 屋 紀 美 雄

発行所 日 伯 文 化 普 及 会
ブラジル、サン・パウロ市、
サンジヨアキン街二八一